

あき やま す わ だいら
秋山諏訪平遺跡Ⅱ
— B地点の調査 —

2010

本庄市遺跡調査会

序

本庄市児玉の地は、古くは武蔵武士「児玉党」児玉氏の発祥の地とされ、中世の幹線道路であった鎌倉街道の宿や市の栄えた要衝の地として知られております。秋山諏訪平遺跡は、この古代集落跡の北東縁に接して「鎌倉街道上道」^{かみづみち}がとおり、付近ではちょうど街道が国道254号線の路線と一致しているところから、近年数多くの発掘調査が実施されております。これらの調査によりますと、この「街道」を挟んで古代集落と古墳群の土地が分かれており、この道が古墳時代以降の土地利用の基準になっていたことを窺わせます。このように、この街道は中世の幹線であるばかりでなく、その起源は古代にまで遡る武蔵国府に通じる道であった可能性も推定されており、脈々と続く歴史の積み重ねに思いを馳せるのは私ばかりではないでしょう。

このたび、この秋山諏訪平遺跡で発掘調査された古代の集落跡については、この発掘調査報告書という形で永く後世に伝えることになりました。これらの埋蔵文化財は、後世に伝えて行くとともに、地域の理解のために生かし、私たちのよって立つ基盤を再確認するためのひとつの資料として活用して行くことが、今後の文化財保護の課題であると考えております。

ここに、この発掘調査報告書が刊行できましたことは、飯島新次郎様、有限会社早川建設工業をはじめとする関係各位ならびに関係諸機関の皆様のご協力の賜と深く感謝いたします。このささやかな調査報告書は、埋蔵文化財の保護・活用にとっての第一歩であるに過ぎませんが、この地域の住民皆様はもとより、教育や研究にたずさわる皆様のご参考となりえるならば幸いです。

平成22年10月21日

本庄市遺跡調査会
会長 茂木孝彦

秋山諏訪平遺跡B地点発掘調査組織 児玉町遺跡調査会（平成2年度：抜粋）

会 長	野口敏雄	児玉町教育委員会教育長
理 事	田島三郎	児玉町文化財保護審議委員長
	清水守雄	児玉町文化財保護審議委員
	武内和雄	児玉町文化財保護審議委員
	野口敏雄	児玉町文化財保護審議委員
	小島和子	児玉町文化財保護審議委員
	吉川 豊	児玉町教育委員会社会教育課長
	幹 事	前川由雄
	金子幸弘	主任
	恋河内昭彦	主事
	徳山寿樹	主事
調査員	鈴木徳雄	児玉町教育委員会社会教育課主任
	尾内俊彦	児玉町遺跡調査会調査員

秋山諏訪平遺跡B地点整理・報告組織 本庄市遺跡調査会（平成22年度）

会 長	茂木孝彦	本庄市教育委員会教育長
理 事	清水守雄	本庄市文化財保護審議委員
	腰塚 修	本庄市教育委員会事務局長（会長代理）
監 事	八木 茂	本庄市監査委員事務局長
	田島弘行	本庄市会計課長
幹 事	金井孝夫	本庄市教育委員会文化財保護課長（事務局長）
	鈴木徳雄	副参事兼課長補佐
	太田博之	埋蔵文化財係長
	恋河内昭彦	埋蔵文化財係主査
	大熊季広	埋蔵文化財係主査
	松本 完	埋蔵文化財係主任
	松澤浩一	埋蔵文化財係主任
	の野善行	埋蔵文化財係臨時職員

例言

- ・本書は、埼玉県本庄市児玉町秋山諏訪平 594 番地－1 に所在する秋山諏訪平遺跡 (No.54-044) B 地点の発掘調査報告書である。
 - ・秋山諏訪平遺跡では、本庄市遺跡調査会報告書第 17 集が既に刊行されており、本書は秋山諏訪平遺跡の 2 冊目の報告書となることから、『秋山諏訪平遺跡Ⅱ－B 地点の調査一』とする。
 - ・発掘調査は、建売分譲住宅建設に伴い記録保存を目的として、平成 3 年度に児玉町教育委員会の指導に基づいて児玉町遺跡調査会が実施したものであり、発掘調査および報告書の刊行に要した経費は、飯島新次郎氏および有限会社早川建設工業の委託金である。
 - ・発掘調査の担当には、鈴木徳雄 (児玉町教育委員会社会教育課主任：当時) および尾内俊彦 (児玉町遺跡調査会：当時) があたり、尾内が調査員として現地で専従した。
 - ・整理作業の一部および報告書作成作業は、本庄市遺跡調査会が栃毛野考古学研究所に委託して実施した。
 - ・本書は、第 I 章を本庄市教育委員会文化財保護課が、第 II 章を鈴木徳雄、その他の原稿および編集を石丸敦史 (栃毛野考古学研究所) が行なった。
 - ・出土遺物の整理、実測図、観察表、写真撮影は石丸が主として行った。
 - ・本書に掲載した出土遺物、遺構等の実測図ならびに写真等の資料は、掲載以外の資料も含めて本庄市教育委員会が保管している。
 - ・発掘調査および本書の作成にあたって、下記の方々や機関より御助言・御協力を賜った。ここに記して感謝いたします。(順不同、敬称略)
- 岡本一雄、大屋道則、小宮山克己、高村敏則、千装 智、長滝歳康、平田重之、矢内 勲、山口逸弘、埼玉県教育局生涯学習文化財課、児玉郡市文化財担当者会 (当時)

凡例

1. 本書所収の各遺構図における方位針は座標北をさす。
2. 本調査における遺構名称は下記の記号を使用した。
SI…住居跡
3. 本書に掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は以下を原則とし、各挿図中にはスケールを付している。
【遺構図】 遺構全測図… 1 / 200 住居跡… 1 / 60 【遺物実測図】 土師器・須恵器… 1 / 4
4. 遺構断面図の水準数値は海拔を示す。単位は m である。
5. 遺構図面中の斜線トーンは地山を示す。
6. 遺物観察表に示した色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局) を用いた。
7. 遺構の規模は上端での計測値を原則としている。
8. 遺物観察表中の単位は、法量は cm、重さは g である。() 内の数値は復元値を示す。
9. 本書掲載の位置図は旧児玉町都市計画図 1 / 2,500 に加筆したものを用了。

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	

挿図目次	
挿表目次	
写真図版目次	

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の環境	2
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	4
III 調査の方法と経過	6
1 調査の方法	6
2 調査の経過	6
IV 調査の成果	8
1 遺跡の概要	8
2 検出された遺構と遺物	8
(1) 竪穴住居跡	8
V まとめ	52

引用・参考文献

写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

図 1	周辺の遺跡	3	図 34	SI-17	31
図 2	秋山諏訪平遺跡 B 地点調査区位置図	6	図 35	SI-18	32
図 3	秋山諏訪平遺跡 B 地点全体図	7	図 36	SI-19	33
図 4	SI-01 出土遺物	8	図 37	SI-19 出土遺物	33
図 5	SI-01	9	図 38	SI-20	33
図 6	SI-02	10	図 39	SI-20 出土遺物	34
図 7	SI-02 出土遺物	11	図 40	SI-21	35
図 8	SI-03	12	図 41	SI-22 出土遺物	35
図 9	SI-03 出土遺物	12	図 42	SI-22	36
図 10	SI-04	13	図 43	SI-23	37
図 11	SI-04 出土遺物	13	図 44	SI-24 出土遺物	37
図 12	SI-05	14	図 45	SI-24	38
図 13	SI-06 出土遺物	14	図 46	SI-25	39
図 14	SI-06	15	図 47	SI-25 出土遺物	39
図 15	SI-07	16	図 48	SI-26	40
図 16	SI-07 出土遺物	16	図 49	SI-26 出土遺物	40
図 17	SI-08	17	図 50	SI-27	40
図 18	SI-09 出土遺物	18	図 51	SI-27 出土遺物	41
図 19	SI-09	19	図 52	SI-28	41
図 20	SI-10	20	図 53	SI-28 出土遺物 (1)	42
図 21	SI-10 出土遺物	20	図 54	SI-28 出土遺物 (2)	43
図 22	SI-11	21	図 55	SI-29 出土遺物	44
図 23	SI-11 出土遺物	22	図 56	SI-30 出土遺物	45
図 24	SI-12	23	図 57	SI-29・30・31	46
図 25	SI-12 出土遺物	23	図 58	SI32・33	47
図 26	SI-13	24	図 59	SI-32 出土遺物	47
図 27	SI-13 出土遺物	25	図 60	SI-33 出土遺物	48
図 28	SI-14	26	図 61	SI-34 出土遺物	49
図 29	SI-14 出土遺物	27	図 62	SI-35 出土遺物	50
図 30	SI-15 出土遺物	29	図 63	SI-34・35	50
図 31	SI-16 出土遺物	29	図 64	SI-36	51
図 32	SI-15	30	図 65	SI-36 出土遺物	51
図 33	SI-16	30			

挿表目次

表 1	SI-01 出土遺物観察表	9	表 18	SI-19 出土遺物観察表	33
表 2	SI-02 出土遺物観察表 (1)	10	表 19	SI-20 出土遺物観察表	34
表 3	SI-02 出土遺物観察表 (2)	11	表 20	SI-22 出土遺物観察表 (1)	35
表 4	SI-03 出土遺物観察表	12	表 21	SI-22 出土遺物観察表 (2)	36
表 5	SI-04 出土遺物観察表	13	表 22	SI-24 出土遺物観察表	38
表 6	SI-06 出土遺物観察表	14	表 23	SI-26 出土遺物観察表	40
表 7	SI-07 出土遺物観察表 (1)	16	表 24	SI-27 出土遺物観察表	41
表 8	SI-07 出土遺物観察表 (2)	17	表 25	SI-28 出土遺物観察表 (1)	43
表 9	SI-09 出土遺物観察表	18	表 26	SI-28 出土遺物観察表 (2)	44
表 10	SI-10 出土遺物観察表	21	表 27	SI-29 出土遺物観察表	44
表 11	SI-11 出土遺物観察表	22	表 28	SI-30 出土遺物観察表	45
表 12	SI-12 出土遺物観察表	23	表 29	SI-32 出土遺物観察表	47
表 13	SI-13 出土遺物観察表	25	表 30	SI-33 出土遺物観察表 (1)	48
表 14	SI-14 出土遺物観察表 (1)	27	表 31	SI-33 出土遺物観察表 (2)	49
表 15	SI-14 出土遺物観察表 (2)	28	表 32	SI-34 出土遺物観察表	49
表 16	SI-15 出土遺物観察表	29	表 33	SI-35 出土遺物観察表	50
表 17	SI-16 出土遺物観察表	31	表 34	SI-36 出土遺物観察表	51

写真図版目次

写真図版 1	SI-01 出土遺物	写真図版 4	SI-22 出土遺物
	SI-02 出土遺物		SI-24 出土遺物
	SI-03 出土遺物	写真図版 5	SI-25 出土遺物
	SI-04 出土遺物		SI-26 出土遺物
	SI-06 出土遺物		SI-27 出土遺物
	SI-07 出土遺物		SI-28 出土遺物 (1)
写真図版 2	SI-09 出土遺物	写真図版 6	SI-28 出土遺物 (2)
	SI-11 出土遺物	写真図版 7	SI-28 出土遺物 (3)
	SI-10 出土遺物		SI-29 出土遺物
	SI-12 出土遺物		SI-30 出土遺物
	SI-13 出土遺物 (1)		SI-32 出土遺物
写真図版 3	SI-13 出土遺物 (2)		SI-33 出土遺物 (1)
	SI-14 出土遺物	写真図版 8	SI-33 出土遺物 (2)
写真図版 4	SI-15 出土遺物		SI-34 出土遺物
	SI-16 出土遺物		SI-35 出土遺物
	SI-19 出土遺物		SI-36 出土遺物
	SI-20 出土遺物		

I 調査に至る経緯

本報告にかかる発掘調査は、分譲住宅建設に伴って失われる埋蔵文化財の記録保存のために実施されたものであり、発掘調査に至る経緯の概要は以下のとおりである。

埼玉県児玉郡児玉町大字秋山（現本庄市児玉町秋山）字諏訪平 594-1 の 1,370 m²において、分譲住宅建設計画に基づき、飯島新次郎氏から開発予定地内における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについての照会および試掘調査の依頼が、平成 2 年 3 月 3 日付けで児玉町教育委員会に提出され、同年 3 月 16 日に試掘調査を実施した。その結果、周知の埋蔵文化財包蔵地（No. 54-044）に相当するとともに、試掘調査によって古墳時代をはじめとする住居跡等が検出されたところから、秋山諏訪平遺跡（54-044）の一部を構成する古代集落跡であり、現状変更工事を実施する場合は、事前に町教育委員会とその保存措置について協議し、文化財保護法第 57 条の 2 の規定により埋蔵文化財発掘届を提出の提出が必要である旨の回答を行った。

その後、児玉町教育委員会は、試掘調査の結果を踏まえて埋蔵文化財の現状変更を最小限に実施するように飯島新次郎氏と協議を行ったが、有限会社早川建設工業による具体的な建売分譲住宅建設の計画が具体化し、埋蔵文化財への影響は避けがたく、埋蔵文化財が失われる区域の発掘調査を実施する必要が生じた。以上の協議を踏まえて平成 3 年 3 月 11 日に飯島新次郎氏より発掘調査依頼書が提出されたところから、児玉町教育委員会の指導に基づいて児玉町遺跡調査会会長野口敏雄と飯島新次郎氏および有限会社早川建設工業代表取締役早川秀夫氏との間で埋蔵文化財保存事業委託契約を締結することで発掘調査を実施することとなった。

発掘の実施にあたって、平成 3 年 3 月 11 日に飯島新次郎氏より、文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」が提出された。この発掘の届出に基づいて、埼玉県教育委員会教育長から、平成 10 年 2 月 20 日付け教文第 3-339 号で飯島新次郎宛に「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知があり、土木工事等の着工前の発掘調査実施の指示および発掘調査により重要遺構等が発見された場合の別途協議の必要について通知された。

発掘調査の実施については、児玉町遺跡調査会会長野口敏雄から文化財保護法第 57 条第 1 項の規定に基づいて、平成 3 年 3 月 11 日付けで「埋蔵文化財発掘調査の届出について」が児玉町教育委員会に提出されたので、同日児教社第 465 号で埼玉県教育委員会教育長に進達した。この発掘調査の届出に基づいて、埼玉県教育委員会教育長から教文第 5-201 号で児玉町教育委員会教育長に通知があり、児玉町遺跡調査会会長宛に、文化庁長官より平成 3 年 5 月 29 日付委保第 5 の 508 号で「埋蔵文化財発掘について」の通知があった。なお、発掘調査は、平成 3 年 3 月 25 日に開始され、同年 6 月 29 日に終了した。

（本庄市教育委員会文化財保護課）

II 遺跡の環境

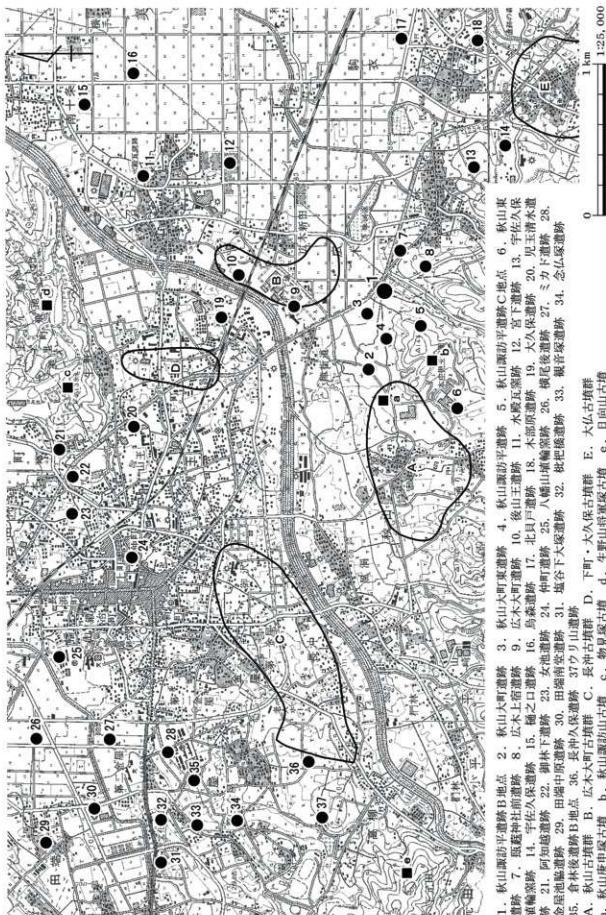
1 地理的環境

秋山諏訪平遺跡の所在する本庄市は、平成18年1月10日に旧本庄市と旧児玉町が合併し、人口約82,000人の埼玉県北部の中心的な都市となった。「本庄市」の市域は、東西約17.2km、南北約17.3km、面積89.71k㎡に及び、東は深谷市および児玉郡美里町、西は児玉郡神川町、南は秩父郡皆野町および長瀨町、北西は児玉郡上里町、また北側は利根川を挟んで群馬県伊勢崎市に接する、埼玉県の北西部に位置している。

本庄市の地形は、市域の南東側が八王子―高崎構造線に相当する断層崖を境に三波川系結晶片岩帯に相当する上武山地が位置し、この上武山地に接して第三紀層を基盤にもつ児玉丘陵が平野部に突出している。また、この児玉丘陵の延長上には、やはり第三紀の残丘である生野山・浅見山等の丘陵が点列状に存在している。市域の北西側は関東平野西端を構成する神流川扇状地が展開しており、本庄台地とも呼称される。この扇状地扇状部に相当する区域には、神川町大字二宮所在の延喜式内社である金鑽神社付近を水源とする金鑽川と、本庄市児玉町宮内付近に水源を発する現在の「女堀川」によって開析された沖積低地が形成されている。また、神流川扇状地の扇端部に相当する深谷断層を境に、その北側には烏川によって形成されたと考えられる烏川低地が展開している。烏川や利根川は、たびたび流路が変化したことが知られているが、近世以降ではこの低地帯に利根川が流下している。

児玉丘陵の南側には、上武山地内の秩父郡皆野町金沢付近に水源を発する小山川を挟んで松久丘陵が展開し、北東方向に発達した扇状地地形を天神川・志戸川水系の小河川によって開析された低地帯が展開している。また、この扇状地の東側には、諏訪山・山崎山といった第三紀層の独立丘が北東方向へ展開しており、本庄市域の地形と対比し得るような景観を形成している。この志戸川水系の沖積地には、古くから水田が営まれ、圃場整備以前には条里形地割が広域に認められ、埼玉県指定史跡「十条条里遺跡」の石碑がかつての景観を偲ばせている。これらの旧那珂郡の条里水田は、小山川の水源地で灌漑される区域をもっているが、小山川は児玉市街付近では伏流しており、美里町十条付近で表流水量が増加しながら本庄市五十子付近で女堀川と、深谷市域において志戸川と合流し利根川へと注いでいる。

秋山諏訪平遺跡は、本庄市児玉町市街の南東約2.5kmの児玉町秋山に位置し、利根川水系の小山川の右岸に相当する区域に位置している。本遺跡の東側には現在水田として利用されている小支谷を挟み、その対岸は児玉郡美里町大字広木に接している。この小支谷内には、児玉町秋山字郷土付近の湧水に発する細流があり、今回報告の諏訪平遺跡B地点の東側の溜池に貯水され下流域の灌漑に供されている。本遺跡の範囲は、南は「諏訪山」と呼ばれる松久丘陵の一角を構成する残丘性の丘陵の頂上付近にまで及んでおり、本遺跡北端は、丘陵の北東斜面から「諏訪平」と呼ばれる台地上に展開している。この「諏訪山」は、近世以来秋山地区の入会地であり、現在も共有林として管理されている。この秋山「諏訪山」丘陵の西側には、八王子―高崎構造線付近より流下する秋山川が、北流しつつ小山川に注いでいる。また、丘陵の西側には秋山川によって形成された幾条かの東流する古い河道跡が確認しえる。



1. 秋山諏訪平遺跡B地点 2. 秋山大町遺跡 3. 秋山大町遺跡 4. 秋山諏訪平遺跡 5. 秋山諏訪平遺跡C地点 6. 秋山東遺跡 7. 犀野神社前遺跡 8. 広木上宿遺跡 9. 広木大町遺跡 10. 後山王遺跡 11. 水野瓦室跡 12. 宮下遺跡 13. 宇佐久保城輪郭跡 14. 宇佐久保遺跡 15. 樋之口遺跡 16. 鳥森遺跡 17. 北貝戸遺跡 18. 木部原遺跡 19. 大久保遺跡 20. 見玉清水遺跡 21. 阿知志遺跡 22. 御林下遺跡 23. 女池遺跡 24. 仲町遺跡 25. 八幡山陣輪郭跡 26. 桐尾後遺跡 27. ミカ下遺跡 28. 金屋池監遺跡 29. 田端中原遺跡 30. 田端南堂遺跡 31. 塩谷下大塚遺跡 32. 枇杷橋遺跡 33. 観音塚遺跡 34. 念仏塚遺跡 35. 倉林後遺跡 29. 田端中原遺跡 30. 田端南堂遺跡 31. 塩谷下大塚遺跡 32. 枇杷橋遺跡 33. 観音塚遺跡 34. 念仏塚遺跡
- A. 秋山古墳群 B. 広木大町古墳群 C. 長沖古墳群 D. 下町・大久保古墳群 E. 大仏古墳群
 a. 秋山庚申塚古墳 b. 秋山諏訪山古墳 c. 物見塚古墳 d. 生野山將軍塚古墳 e. 日向山古墳

図1 周辺の遺跡

今回の調査にかかる秋山諏訪平遺跡B地点は、国道254号線から南へ約40m、「諏訪山」裾部の台地端部に相当する標高94m前後の東側緩斜面に位置している。なお、調査地点付近での東側の谷との比高差は約4mを測る。

2 歴史的環境

本庄市域における古墳時代の遺跡は、古墳時代前期に入ると集落が増加するが、これは低地域の開発が急速に進展するためである。この開発は、主として生野山丘陵以北の「女堀川」流域の低地域の灌漑および排水が進展したためであり、後張遺跡群をはじめとする集落が形成される。このような低地域の開発と集落の設営に伴って丘陵部を中心に鷺山古墳をはじめとする古式古墳が相次いで築造されることは注目すべき点である。こうした集落遺跡の占地の傾向は古墳時代中期以降においても継続するとともに、丘陵部にも開発が及んでいる。

本遺跡の近傍には、秋山古墳群（坂本他1990）が位置している。この秋山古墳群は、おおむね小山川（旧身馴川）に沿って帯状に展開しており、さらに小山川に沿った西側の本遺跡より北東約500mには広木大町古墳群（小淵他1980・長滝他2004・2005）が位置している。また、秋山古墳群の小山川の対岸には長沖古墳群（菅谷他1980他）が、また広木大町古墳群の対岸には、やはり小山川に沿うように下町・大久保古墳群の存在が知られている。このようにこれらの古墳群は、おおむね小山川に沿って分布しており、また古墳群を構成する古墳の石室には、この小山川の河床礫である三波川系の結晶片岩をその用材としているという共通性をもっている。

秋山古墳群を構成する古墳の総基数は、諏訪山丘陵上に位置する前方後円墳である秋山諏訪山古墳や、二重の周堀をもつ秋山庚申塚古墳を含む43基の古墳が現存する（坂本他1990）。このほか消滅した古墳は、確認しえるものでも30基あり、少なくとも秋山古墳群は73基以上の古墳によって構成されていたことは確実である。この古墳群における古墳の分布する区域は、幾つかの地形的区分にわたっているが、特に古墳群中央に流下する秋山川が地形上の大きな境界を成し、古墳群を大きく東西の二群に区分している。この二つの区域の中心に、各々に、より高位で比較的分布の集中する丘陵区域と低位な段丘・台地区域の区分を認めることができるが、本遺跡の位置する諏訪山丘陵および諏訪平と呼ばれる台地表面には、前方後円墳である秋山諏訪山古墳が丘陵西南の頂部に位置する以外は古墳の分布は認められない。なお、秋山川東側の区域には、秋山川の幾つかの旧河道の痕跡があるが、これらは古墳群内の支群や集落跡を隔てるものとなっている。

小山川右岸に位置する、本遺跡の周辺には、秋山大町遺跡、広木大町遺跡（小淵他1980）、秋山東遺跡（恋河内他1987）、^{山ノ内} 照庭神社前遺跡（中村他1980）、広木上宿遺跡（山本1996）、秋山郷戸遺跡等の古墳時代後期～平安時代の集落址があり、とくに古墳時代後期には集落の形成は活発である。また、秋山古墳群と広木大町古墳群との間に古墳時代後期を中心とする秋山大町遺跡が占地しているが、広木大町遺跡と秋山大町遺跡の間には集落の認められない区域が存在しているようであり、それぞれは別の集落遺跡を構成するものと見做してよいであろう。

本遺跡の位置する児玉町秋山地区は、旧武蔵国那珂郡に相当する区域である。旧児玉郡においては律令期の集落が、糸里水田の展開する低地内の微高地上には極めて少なく、低地を臨む平坦な台地上に展開していることが知られているが、那珂郡においても同様の状況が予想される。古代児玉郡にお

いては神流川からの導水にかかる「古九郷用水」によって灌漑が開始されており、律令期における集落の占地や水田の造成等の景観の形成が計画的かつ構造的に進行したことを示している。しかし、那珂郡に相当する小山川（旧身馴川）灌漑区域は、志戸川や天神川の灌漑区域とは独立的な独自の水系であり、小山川の伏流水を利用して条里水田を灌漑するものである（鈴木 1987）。なお、秋山諏訪平遺跡のD地点では古墳時代と平安時代の溜井が形成され、付近の灌漑に供されたことが知られている（松澤 1998）。

古墳時代後期において集落の密集したこの区域も、奈良時代の集落跡は比較的小規模である。しかし、東小平地区においては塔心礎石をもつ塔跡を伴う東小平中山廃寺が建立されており、在地社会に財力を蓄積した階層が形成されていたことも注意されなければならない。本遺跡の周辺では奈良時代において集落が幾分衰退するものと推定されるが、平安時代においては再び集落形成が活発となるようである。ちなみに、「那珂郡」は承和十年（843年）「戸口増益」により小郡から下郡になり郡司一名の増員がはかられたことが知られており、この時期には郡司層が律令的な関係の再編強化による段階にあったことが推定される。なお、本遺跡の北東約 500m には延喜式内社である毘羅神社が鎮座している。

中世の那珂郡については、本遺跡の東側約 500m に位置する小型宝塔 5 基、小型未開敷蓮華 5 点や鎌倉時代の複数の軒平瓦や軒丸瓦等が出土し、中世の基壇状遺構や掘立柱建物が見出されている広木上宿遺跡（山本 1996・長滝他 2010）の存在が注目される。また、本遺跡の北東約 2km には鎌倉二階堂の永福寺の同範瓦を焼成した水殿瓦窯跡（丸山 1990）の存在も注目されよう。なお、秋山地区には「徳治貳年般若寺」銘をもつ軒平瓦をもつ般若寺廃寺があり、この寺院も徳治二年（1307年）には建立されたと考えることができる。ちなみに、児玉党系在地領主である「児玉氏」は、小山川（旧身馴川）を挟んだ対岸の本庄市児玉町児玉の区域にその本貫地が相当しており、その経済基盤となった領域が小山川左岸および丘陵部に相当している。また、天神川流域を中心に猪俣党系在地領主層の分布が推定されているが、本遺跡周辺の区域はこれらの在地領主群とは独立した独自の区域であったと推定することができる。かつて、この区域については東寺領荘園である丹波国大山庄の地頭として補任され西遷した中澤氏の存在に着目し、その本貫地であると推定したことがあるが、中澤氏と秋山字中澤のつながりや、14 世紀中葉頃には本遺跡に隣接する美里町広木に「中澤広木常麻」という人物が居住していたこと、あるいは中澤氏の本貫地と推定される「和田村」等の関連を考慮するならば、この区域が中澤氏の本貫地とその周辺にかかる領域であったと推定してよいであろう。

ともあれ、美里町広木地区や本遺跡周辺の開墾は、本遺跡の北東約 800m に位置する摩訶池と呼ばれる広大な溜池の設置の問題を含めて再検討すべき課題も多いといえるが、中澤氏もまた、条里水田の縁辺部から丘陵部を中心に主要な経済基盤としたものと推定される。なお、本遺跡の東側に接して「鎌倉街道」が通っており、小山川を挟んだ対岸の「児玉」の区域は、児玉党「児玉氏」の本貫地として位置づけられるとともに、この「鎌倉街道」の宿と市庭が発達していたことにも注意しておくべきであろう。このように本遺跡の位置する本庄市児玉町秋山諏訪平の区域とその周辺は、古墳時代より秋山古墳群や広木大町古墳群を控えた位置であり、小山川の氾濫原を臨む区域として多様な土地利用が行われた区域に相当している。

（鈴木徳雄）

Ⅲ 調査の方法と経過

1 調査の方法

発掘調査は、現表土から約70cm下、ローム層上面において遺構検出を行った。重機によって表土、耕作土を除去したのち、手作業によって遺構検出を行った。遺構測量は、各遺構の平面図および断面図を縮尺1/20を基準として作成した。

出土遺物は、洗浄の後、溶剤型接着剤（セメダインC）を用いて接合した。また復元については石膏を使用した。遺構図面は整図の後、デジタルトレースを行った。遺物は縮尺1/1で実測図を作成し、製図用ペン（ロットリング）でトレースした。遺物写真においては、デジタルカメラ（Nikon D200）を使用した。

2 調査の経過

現地における発掘調査は、平成3年3月25日から平成3年6月29日までの約3カ月間実施した。今回の発掘調査にかかる調査区（B地点）は、全域が南東側に傾斜する緩斜面であり、調査区の北西側については表土が薄く、ローム層上面で遺構の確認が可能であったが、南東側では表土下の黑色土の堆積が厚く、黑色土中から遺構を確認して調査を実施した。なお、調査区内の遺構の分布には粗密があり、住居跡の密集する区域では遺構相互の重複が激しく慎重に調査を実施した。遺構の分布は、今回の調査区外まで延びているが、調査区緩斜面の南東側約8mで現在水田となっている谷状の低地

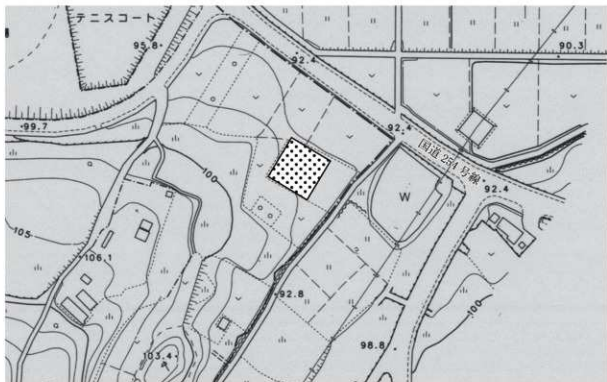


図2 秋山諏訪平遺跡B地点調査区位置図（S=1/2,500）

となっており、本調査区は秋山諏訪平遺跡（No. 54-044）にかかる集落跡の南東側の限界近くに位置しているものと推定される。

発掘調査後の整理作業は、調査終了直後から断続的に実施した。その後、本庄市と児玉町の合併に伴って児玉町遺跡調査会の業務を本庄市遺跡調査会が引き継ぐこととなり、本庄市遺跡調査会は、榎毛野考古学研究所に整理作業の一部および報告書の刊行を委託し、平成22年10月28日に報告書を刊行した。

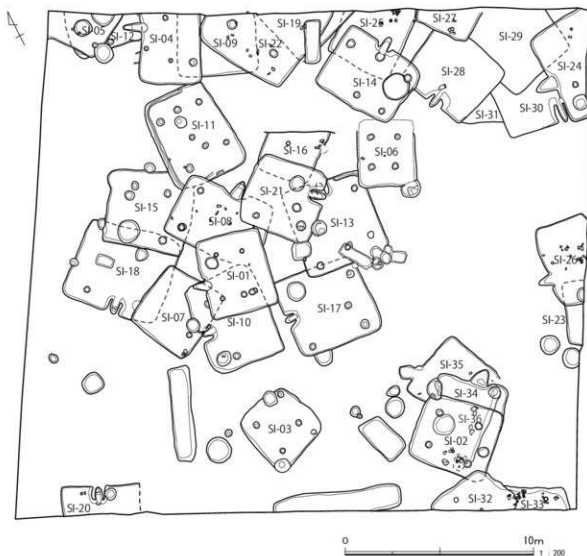


図3 秋山諏訪平遺跡B地点全体図

IV 調査の成果

1 遺跡の概要

諏訪平遺跡は、小山川とその支流である志戸川に挟まれた台地上に位置する。本遺跡の南側には小支谷が入り込んでおり、台地先端部の南斜面に立地する。B地点の調査範囲は、754㎡である。

本調査地点では竪穴建物跡 36 棟・土坑が確認され、古墳時代後期～平安時代に帰属する。それらの遺構は非常に密集して切り合っており、長期間にわたって集落域であったことがわかった。この台地縁辺部には諏訪平遺跡・秋山大町遺跡など古墳時代～古代に至る集落群が広がっており、本遺跡はその一端と想定される。

2 検出された遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

SI-01 (図5、表1/図版1)

概要 東西3.6m×南北4.3mを計測し、平面長方形を呈する。カマドを西側に設置し、煙道は住居壁を掘り込んでいる。カマド北脇には貯蔵穴状の掘り込みが確認されるが、その深さはおおよそ20cmである。主柱穴が4本確認される。

覆土堆積状況 おおむね自然堆積をなしている。

遺物出土状況 土器は集中して出土した状況は認められなかった。2・4はカマド内、3はカマド前面、1は住居北東隅から出土している。

遺物 図化に及んだ遺物は甕・瓶・須恵器片である。甕はコの字甕を主体としており、1・2の口縁端部には面をもつ。

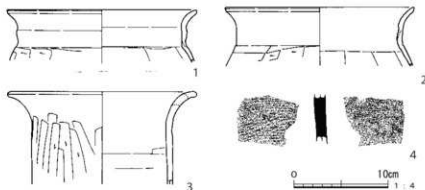
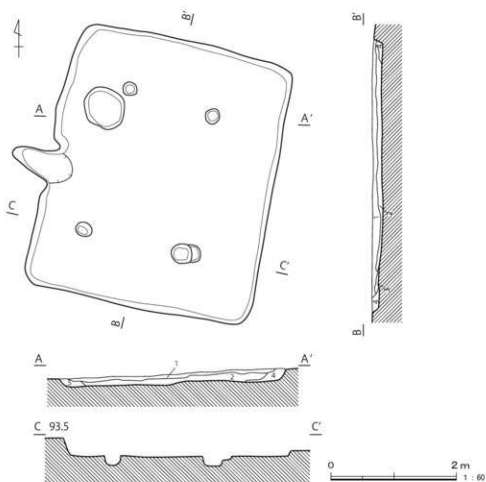


図4 SI-01 出土遺物

表 1 SI-01 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 甕	口径 20.0 底径 — 器高 —	口縁部は「コ」の字状を呈し、 肩部がわずかに張る。	外面はヘラケズリ、内 面はヘラナデを施す。	白色微粒・角閃 石 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
2	土師器 甕	口径 20.0 底径 — 器高 —	口縁部は「コ」の字状を呈し、 肩部がわずかに張る。	外面はヘラケズリ、内 面はヘラナデを施す。	角閃石 外面：赤褐色 内面：赤褐色	
3	土師器 甕	口径 20.0 底径 — 器高 —	口縁部はCの字状を呈し、肩 部は張らず体部まっすぐ伸び る。	外面はヘラケズリ、内 面はヘラナデを施す。	石英・角閃石 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
4	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —		外面は叩き目を残す、 内面はヘラナデを施す。	石英 外面：暗青灰色 内面：暗青灰色	



SI-01 土層説明

1. 明赤褐色土 白色粒子・ローム粒・炭化物粒を均一に含む。しまり・粘性ともない。
2. 明赤褐色土 ローム粒・ローム小ブロックを少量、白色粒子・炭化物粒を微量含む。しまり・粘性ともない。
3. 明赤褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む。しまり・粘性ともない。
4. 暗赤褐色土 ローム粒・ロームブロックを含む。しまり・粘性ともない。
5. 黒色土 ローム粒・白色粒子・炭化物粒を少量含む。しまり・粘性ともない。

図 5 SI-01

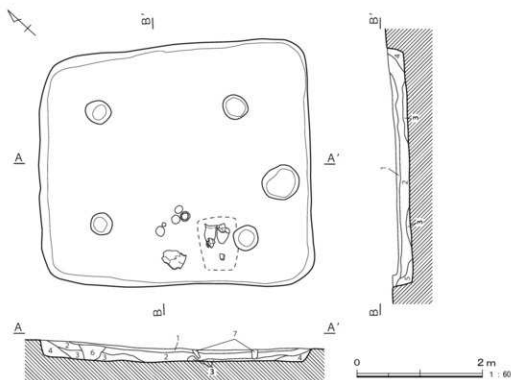
SI-02 (図6・7、表2・3/図版1)

概要 北西-南東4.3m×北東-南西東辺3.9m・西辺3.4mを計測する平面台形を呈する。カマドは南西壁前面に焼土が確認された。貯蔵穴は南東側に位置する。

覆土堆積状況 自然堆積したものと想定されるが、上層(1・2層)からは焼土の包含が確認されている。

遺物出土状況 カマド・焼土部分より甕、カマド北西側より坏類が床面直上より出土している。

遺物 土師器甕・甌・坏が出土している。いずれも古墳時代後期に位置づけられる。



SI-02 土層説明

1. 明黒褐色土 ローム粒・ローム小ブロック・焼土粒を多量、白色粒子・炭化物粒を少量含む。ややしまりあり・粘性はない。
2. 暗茶褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物粒を多量、ロームブロックを少量含む。しまりあり・粘性なし。
3. 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量、焼土粒・炭化物粒を少量含む。しまりあり・粘性弱い。
4. 明黒褐色土 ローム粒・ロームブロックを少量均一に含む。しまり・粘性ともに有するが弱い。
5. 茶褐色土 ローム粒を少量均一に含む。しまり・粘性ともに有するが弱い。
6. 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロック・焼土粒を少量均一に含む。しまり弱い・粘性なし。
7. 植物根による擾乱。

図6 SI-02

表2 SI-02 出土遺物観察表(1)

№	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 13.8 底径 - 器高 3.2	口縁部は有段状をなす。底部は丸底。	底・体部外面はヘラケズリ。その他はナゲ調整を基調とする。	石英 外面：赤褐色 内面：橙色	
2	土師器 坏	口径 14.6 底径 - 器高 3.7	底部は丸底。体部から稜をなしたのち、口縁部はまっすぐ外方へ開く。	底・体部外面はヘラケズリ。その他はナゲ調整を基調とする。	白色微粒 外面：明褐色 内面：黒色	

表3 SI-02 出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	土師器 杯	口径 14.9 底径 — 器高 4.2	底部は丸底。口縁部はわずかに外反しながら開く。	底・体部はヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	白色微粒 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
4	土師器 杯	口径 15.5 底径 — 器高 4.3	底部は丸底。体部から緩やかな稜をなしたのち口縁部は内傾する。	底・体部はヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	石英・白色微粒 外面：黒色 内面：黒色	
5	土師器 大形杯	口径 15.2 底径 — 器高 6.4	底部は丸底。体部から稜をなしたのち、口縁部はわずかに外反しながら内傾する。	底・体部はヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	白色微粒 外面：黒色 内面：黒褐色	
6	土師器 小形甕	口径 13.5 底径 5.0 器高 14.9	底部は平底で正置できる。器形は歪みが見られるが、最大径を体部上位にもつ。	体部外面にヘラケズリを施す。その他はナデ調整を基調とする。	白色粒 外面：褐色 内面：黒色	
7	土師器 甕	口径 17.7 底径 6.6 器高 29.0	底部は平底で、砲弾形の体部を有する。	体部外面に縦位ヘラケズリを施す。体部内面には横位のヘラナデが観察される。	石英・結晶片岩 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
8	土師器 甕	口径 25.4 底径 8.6 器高 34.0	底部は開放される。器形は最大径を口縁部にもつ逆台形を呈する。	外面は縦位ヘラケズリ。内面は縦位ミガキを施し、平滑面をなす。	石英・赤褐色粒 外面：橙色 内面：橙色	

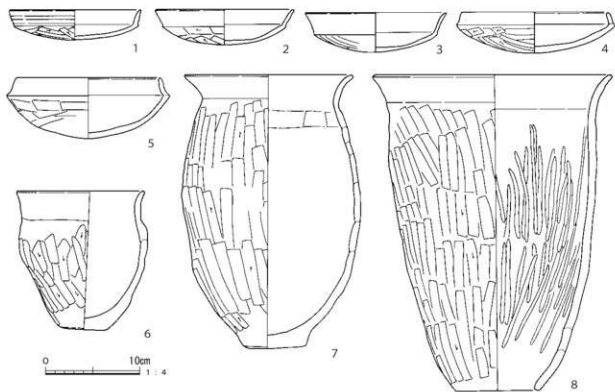


図7 SI-02 出土遺物

SI-03 (図8・9、表4/図版1)

概要 東西3.4m×南北3.5mを計測し、残存する掘り込みは非常に浅い。平面形態は不整な方形を呈する。カマドおよび炉、それに伴う焼土は確認されなかった。柱穴と想定されるピットが4基検出されたが、その深度は浅い。北東および南西隅に土坑が認められたが、本遺構に伴うものか明らかには出来なかった。

覆土堆積状況 自然埋没と想定され、最下層(2層)には焼土が認められた。

遺物出土状況 南東隅に台石上の礫が出土し、その周辺から土器片が出土した。土師器環(1)は住居南東隅床面より出土した。

遺物 図化に及んだ遺物は、10世紀前半に位置づけられる土師器環1点である。

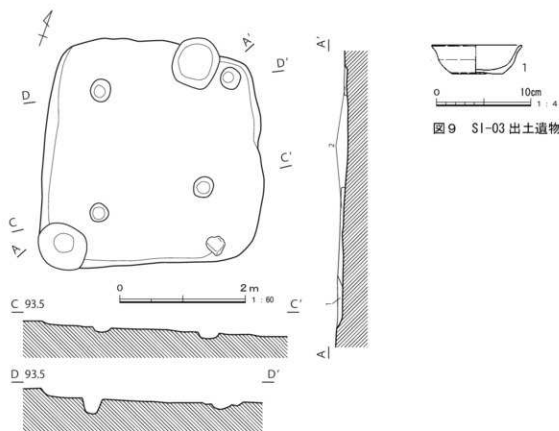


図9 SI-03出土遺物

SI-03土層説明

1. 黒色土 ローム粒を少量、白色粒子を微量含む、しまり・粘性ともない。
2. 黒褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物粒を微量含む、しまり弱い・粘性なし。

図8 SI-03

表4 SI-03出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器環	口径 9.5 底径 5.4 器高 3.0	底部は平底で、内湾しながら立ち上がったのち口縁に向かって外反する。	ロクロ整形。底は回転糸切り。	石英 外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	

SI-04 (図10・11、表5/図版1)

概要 東西3.2m(煙道部分を除く)を計測し、平面方形を呈すると想定される。カマドを西側に設ける。カマド煙道は、住居壁を大きく掘り込んで構築されている。住居中央に2基柱状のピットが確認されたが、その深度は浅い。

覆土堆積状況 自然埋没と想定される。最下層4・5・6層には焼土粒を含まないのに対して、1・2・3層には焼土粒を含む。

遺物出土状況 出土した遺物は少量で、床面からはほとんど出土していない。

遺物 図化に及んだ遺物は1点であるが、本遺構に伴うものではないと判断される。

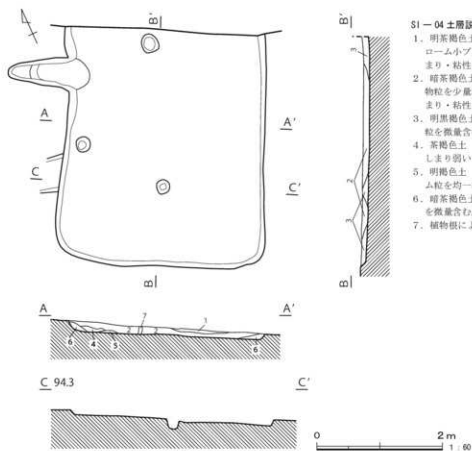


図10 SI-04



図11 SI-04 出土遺物

表5 SI-04 出土遺物観察表

No	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 坏	口径 14.8 底径 6.5 器高 2.9	底部は平底。体部は口縁部に向かってまっすぐ外方へ開く。	ロクロ整形。底は回転糸切り。	灰色粒 外面：黄灰色 内面：黄灰色	

S1-05 (図 12)

概要 住居南西隅角のみが検出され、平面形態は方形を呈するものと想定される。燃焼施設については不明である。東側には土坑が確認され、床面より掘り込まれており、本住居に伴うものと判断される。

遺物出土状況 床面より土器片・礫が散在して出土している。

遺物 出土した遺物は少量で、図化に及んだ遺物はない。

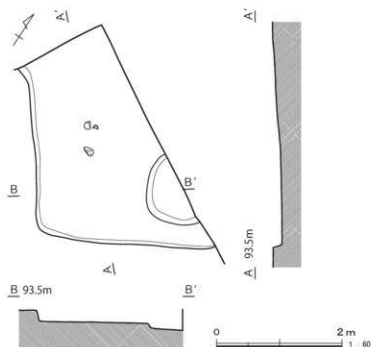


図 12 S1-05

S1-06 (図 13・14、表 6/図版 1)

概要 東西 3.1 m × 南北 3.5 m を計測し、平面長方形を呈する。燃焼施設は不明である。主柱柱が 4 基確認されている。

覆土堆積状況 自然埋没と想定される。

遺物出土状況 西壁前面で検出された礫の周辺から土器片が多く出土している。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器坏 1 点である。覆土中から出土している。古墳時代後期に位置づけられる。

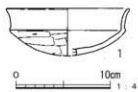


図 13 S1-06 出土遺物

表 6 S1-06 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 (13.0) 底径 5.0 器高 —	底部は丸底で、 いったん稜をな したのち口縁部 は外反する。	底・体部外面は ヘラケズリ。そ の他はナデ調整 を基調とする。	褐色粒 外面：明赤褐 色 内面：明赤褐 色	

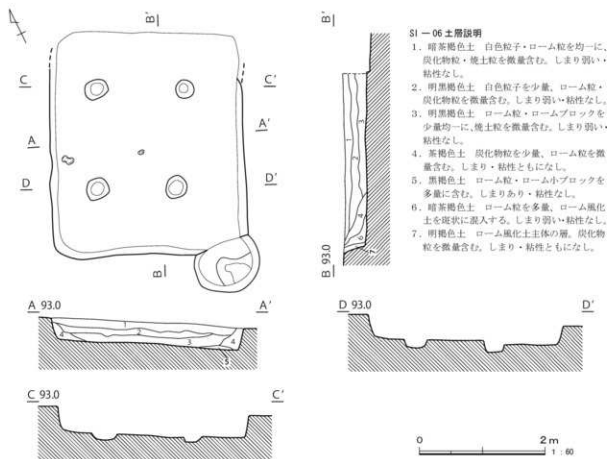


図 14 SI-06

SI-07 (図 15・16、表 7・8 / 図版 1)

概要 東西 3.9 m × 南北 3.7 m を計測し、平面形態はほぼ正方形を呈する。炉・カマドといった燃焼施設は検出されなかった。南壁前面からは深さ約 15 cm の土坑が認められ、本住居跡に伴うものと判断された。明瞭な柱穴は確認されなかった。SI-01 と重複し、SI07 → SI01 の先後関係が把握された。

覆土堆積状況 自然埋没と想定される。

遺物出土状況 遺物は床面より散在して出土している。住居南西隅角部分において小規模な集石が認められた。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器坏 2 点・土師器甕 3 点である。3 は住居中央床面より出土した。その他は覆土中からの出土である。古墳時代後期に位置づけられる。

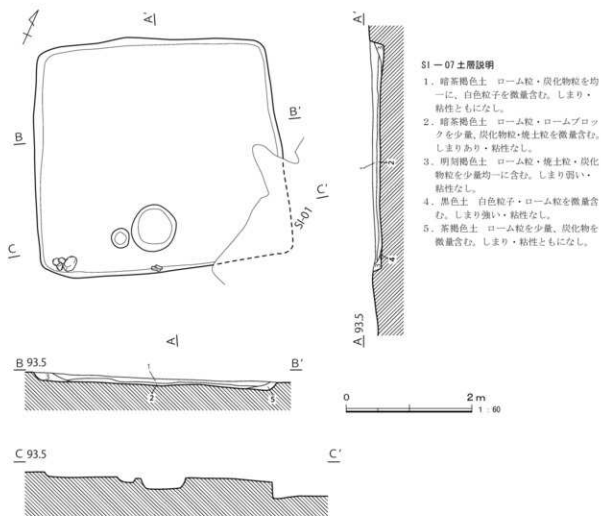


図 15 SI-07

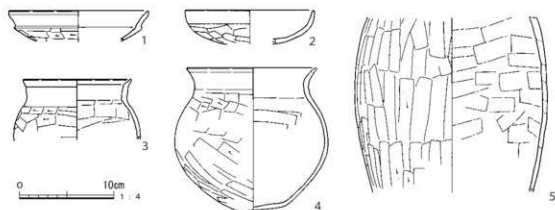


図 16 SI-07 出土遺物

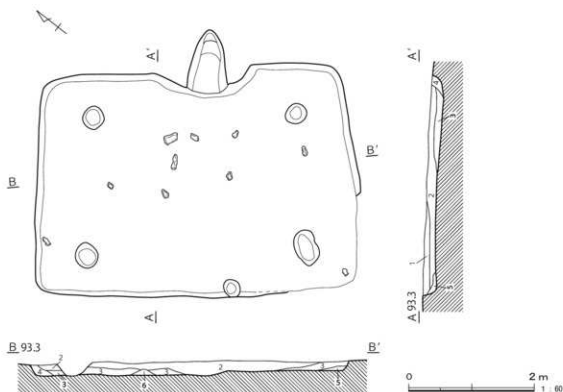
表 7 SI-07 出土遺物観察表 (1)

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 環	口径 (14.8) 底径 — 器高 —	体部と口縁部との境には強い稜をなす。口縁端部は肥厚する。	底・体部外面はヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	白色微粒 外面：黒褐色 内面：にぶい赤褐色	

表 8 SI-07 出土遺物観察表 (2)

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
2	土師器 環	口径 (13.6) 底径 — 器高 —	体部から口縁部に向かって内湾しながら立ち上がる。	底・体部外面はヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	角閃石 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
3	土師器 小形甕	口径 (11.4) 底径 — 器高 —	肩部はわずかに張り、口縁部に向かって開く。口縁端部は外傾し、内面は内削ぎ状になる。	体部外面は横位ヘラケズリ。体部内面は横位ヘラナデ。	白色微粒・角閃石 外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
4	土師器 甕	口径 13.7 底径 4.6 器高 15.2	底部は平底だが、体部との境に明瞭な線をなさない。体部は球形で、口縁部は外反する。	体部外面はヘラケズリ。体部内面はヘラナデ。	白色粒・チャート 外面：黒褐色 内面：黒褐色	
5	土師器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	体部最大径を下半に有すると想定される。	体部外面はヘラケズリ。体部内面はヘラナデ。	石英 外面：にぶい赤褐色 内面：黒色	

SI-08 (図 17)



SI-08 土層説明

1. 暗茶褐色土 焼土粒・ローム粒を多量、炭化物粒・白色粒子を少量含む。しまり・粘性ともになし。
2. 暗茶褐色土 焼土粒・ローム粒を均一に、炭化物粒を少量含む。しまり・粘性ともになし。
3. 明黒褐色土 ローム粒・白色粒子を少量、焼土粒・炭化物を微量含む。しまり弱い・粘性なし。
4. 茶褐色土 ローム粒を少量、炭化物粒を微量含む。しまり弱い・粘性なし。
5. 茶褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物粒を微量含む。しまり弱い・粘性なし。
6. 明褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量、白色粒子を少量含む。しまりあり・粘性なし。

図 17 SI-08

概要 北東-南西 3.5 m (カマド煙道を除く) × 北西-南東 5.1 m を計測し、平面形態は長方形を呈する。カマドを住居北東壁に構築する。主柱穴と想定される 4 基の柱穴が四方に配される。南西壁部分にもピットが 1 基認められ、入り口施設に伴うものか。

覆土堆積状況 おおむね自然埋没と判断される。

遺物出土状況 カマド内より土器片が出土している。カマド前面からは礫が散在しているが、いずれもカマドに伴うものと想定される。

遺物 出土した遺物は細片で、図化に及んだ遺物はない。

SI-09 (図 18・19、表 9/図版 2)

概要 東西 4.0 m を計測する。北側は調査区外であるが、平面形態方形と想定される。炉・カマドといった燃焼施設は明確には確認されていない。しかし、東側覆土内に焼土を多く包含することから、東壁にカマドが存在した可能性が考えられる。明瞭な柱穴は検出されなかった。

覆土堆積状況 自然埋没と判断される。覆土中には焼土を多く含む。

遺物出土状況 床面より出土した土器・礫は、東壁前面に集中する。

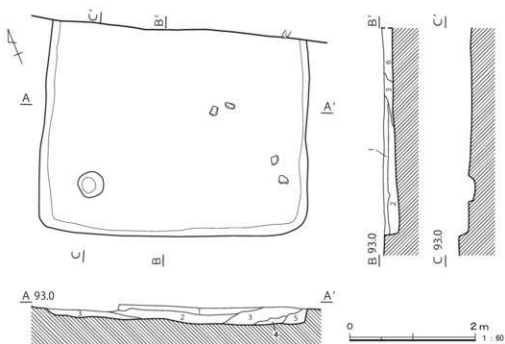
遺物 図化に及んだ遺物は 2 点で、土師器環 1 点・土師器甕 1 点である。1 は、東壁前面の床面より出土している。2 は覆土中からの出土である。8 世紀末に位置づけられる。



図 18 SI-09 出土遺物

表 9 SI-09 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 環	口径 14.0 底径 — 器高 3.9	底部は丸底で、口縁部 に向かって内湾気味に 立ち上がる。	底部外面はヘラケズリ。 その他はナデ調整を基 調とする。	白色微粒・角閃石・石英 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
2	土師器 甕	口径 21.2 底径 — 器高 —	口縁部は「コ」の字状 を呈する。	体部外面はヘラケズリ。	赤褐色粒・角閃石・白色 微粒 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	



SI-09 土層説明

1. 明黒褐色土 ローム粒・白色粒子・炭化物粒を少量均一に含む。しまり弱い・粘性なし。
2. 暗茶褐色土 焼土粒・焼土ブロックを均一に、ローム粒・炭化物粒を少量含む。しまり弱い・粘性なし。
3. 暗茶褐色土 2層に類似するが、焼土多い。
4. 茶褐色土 ローム粒・焼土粒を少量含む。しまり、粘性ともなし。
5. 暗褐色土 焼土粒・粘土粒・ローム粒を均一に含む。しまり弱い・粘性なし。
6. 暗褐色土 5層に類似するが、粘土粒は含まない。

図 19 SI-09

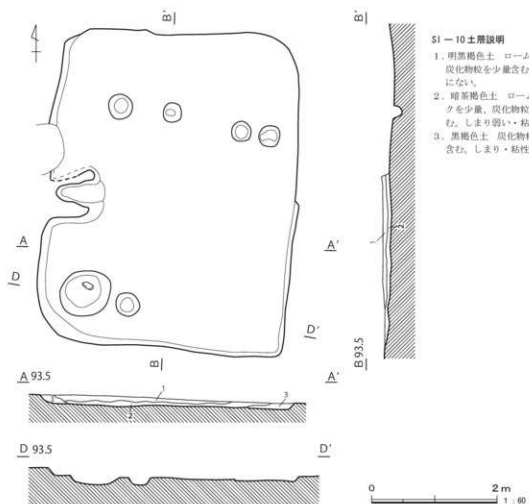
SI-10 (図 20・21、表 10 / 図版 2)

概要 東西 4.0 m × 南北 5.0 m を計測し、平面長方形を呈する。カマドは西側に設けられ、その煙道は堅穴外へは伸びない。貯蔵穴状の土坑が住居南西隅に認められる。柱穴状のビットが 5 基認められるが、その深さはいずれも 20 cm 以内におさまる。

覆土堆積状況 自然堆積と想定される。いずれも炭化物粒を包含する。

遺物出土状況 床面上からの遺物はカマド内および住居南東隅から出土している。

遺物 図化に及んだ遺物は土師器甕 3 点・土師器坏 1 点である。1・2・3 はカマド内より出土している。4 は覆土中より出土している。3 の体部下半にはカマドによると考えられる粘土付着が認められる。



S1-10 土層説明

1. 明茶褐色土 ローム粒を均一に、焼土粒・炭化物粒を少量含む。しまり・粘性ともにない。
2. 暗茶褐色土 ローム粒・ロームブロックを少量、炭化物粒・白色粒子を微量含む。しまり弱い・粘性なし。
3. 黒褐色土 炭化物粒・ローム粒を微量含む。しまり・粘性ともなし。

図20 S1-10

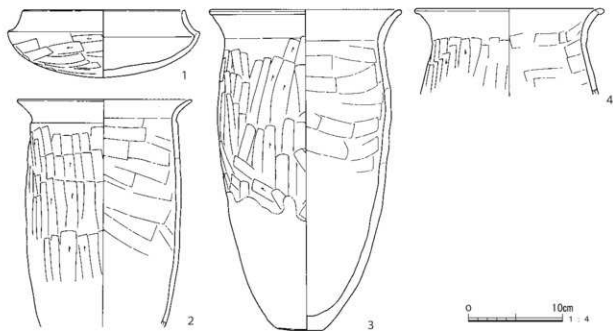


図21 S1-10 出土遺物

表 10 SI-10 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 杯	口径 (17.0) 底径 — 器高 7.1	底部は丸底で、口縁部との境に稜をなしたのち、口縁部はわずかに外反しながら内傾する。	底・体部外面はヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	角閃石・赤褐色粒 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
2	土師器 甕	口径 18.4 底径 — 器高 —	肩部はほとんど張らない。口縁部はわずかに外反しながら大きく開く。	体部外面は縦位ヘラケズリ。体部内面は横位ヘラナデ。	石英・赤褐色粒 外面：橙色 内面：橙色	
3	土師器 甕	口径 20.3 底径 4.3 器高 34.0	体部最大径は上位にもつ。口縁部は外反する。体部外面下半にはカマドに由来する粘土が付着する。	体部外面は縦位ヘラケズリ。体部内面は上半を中心に横位ヘラナデが見られる。	石英・結晶片岩 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
4	土師器 甕	口径 (20.0) 底径 — 器高 —	体部最大径を中位に有すると想定される。口縁部は外反しながら立ち上がる。	体部外面は縦位ヘラケズリ。体部内面はヘラナデ。	石英・結晶片岩 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	

SI-11 (図 22・23、表 11 / 図版 2)

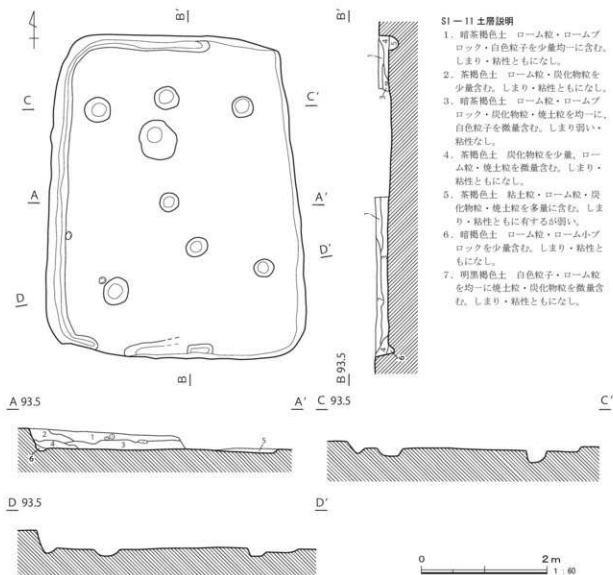


図 22 SI-11

概要 東西4.0 m×南北5.1 mを計測し、平面長方形を呈する。壁際には壁周溝を部分的に巡らせている。炉・カマドといった燃焼施設は確認されていない。柱穴状のピットが複数検出されているが、いずれもその深さは20 cmに及ばない。

覆土堆積状況 おおむね自然堆積と想定されるが、覆土中より炭および焼土が多量に検出され、焼失の痕跡が窺える。

遺物出土状況 床面からは少量の土器の他に炭化材が出土している。

遺物 図化に及んだものは土師器坏1点・土師器小形短頸壺1点・須恵器坏1点である。須恵器坏(3)は、本遺構に伴わないと考えられる。1は西壁前面より出土している。古墳時代後期に位置づけられる。

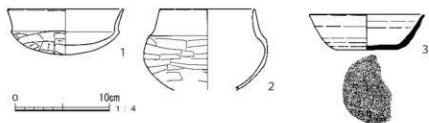


図23 SI-11 出土遺物

表11 SI-11 出土遺物観察表

№	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 (12.2) 底径 — 器高 4.9	底部は丸底。口縁部との境には稜をなす。	底体部外面へラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	赤褐色粒 外面：橙色 内面：橙色	
2	土師器 小形 短頸壺	口径 10.0 底径 — 器高 —	底部は丸底か。体部と口縁との境には稜をなし、口縁部は内傾する。	体部へラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	赤褐色粒 外面：橙色 内面：橙色	
3	須恵器 坏	口径 (12.2) 底径 6.8 器高 3.7	底部は平底で、内外面ともに体部との境には稜をなさない。	ロクロ整形。底は回転糸切り。	石英・雲母片 外面：褐灰色 内面：褐灰色	

SI-12 (図24・25、表12/図版2)

概要 東西3.9 mを計測する。北側は調査区外であるが、平面方形と想定される。炉・カマドおよびそれに伴う焼土は確認されなかったが、土師器瓶が出土していることからカマドの存在が推定される。土層の層序関係から、SI-12→SI-05の先後関係が把握できた。

土層堆積状況 自然埋没と想定される。

遺物出土状況 住居東側床面上より、土師器甕・瓶が出土している。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器甕1点・土師器瓶1点である。いずれも住居床面より出土している。

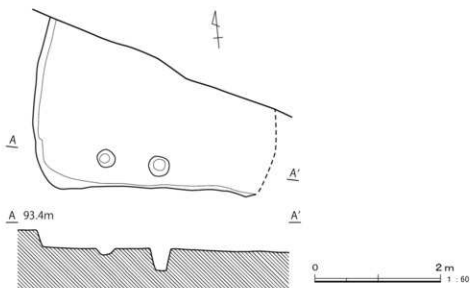


図 24 SI-12

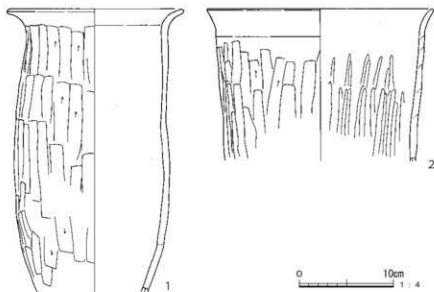


図 25 SI-12 出土遺物

表 12 SI-12 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 甕	口径 18.6 — 底径 — 器高 —	砲弾形を呈する。口縁部は短く外反する。	体部外面縦位ヘラケズリ。	石英・チャート 外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	
2	土師器 瓶	口径 (24.0) — 底径 — 器高 —	底の形態は不明。最大径を口縁部にもつ。	体部外面縦位ヘラケズリ。 体部内面縦位ミガキ。	石英 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい褐色	

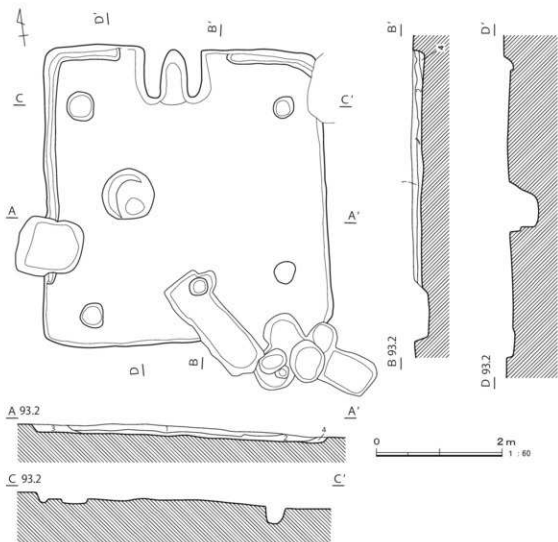
SI-13 (図26・27、表13/図版2・3)

概要 東西4.4m×南北4.7mを計測し、平面正方形を呈する。カマドを北側に設け、その煙道は竪穴外へは伸びない。柱穴状のピットを四方に配するが、東側の2基は深く掘り込まれる。壁周溝を部分的に設ける。

覆土堆積状況 自然埋没と想定されるが、覆土中には焼土を包含する。

遺物出土状況 カマド内および床面上において土器・礫が散在していた。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器坏2点・土師器甕2点・土師器壺1点・須恵器壺1点である。5・6はカマド内から出土している。1はカマド前面、4はカマド周辺、2は住居床面、3は西壁前面から出土している。7世紀末～8世紀初頭に位置づけられる。



SI-13 土層説明

1. 暗茶褐色土 ローム粒・焼土粒・炭化物粒を少量均一に、白色粒子を微量含む。しまり・粘性ともなし。
2. 暗茶褐色土 組成は1層に類似するが、白色粒子を含まず。粘性をわずかに有する。
3. 暗褐色土 ローム粒・ロームブロックを多量に、炭化物粒を微量含む。しまり弱い・粘性なし。
4. 茶褐色土 ローム粒・焼土粒を少量、炭化物粒を微量含む。しまり弱い・粘性なし。

図26 SI-13

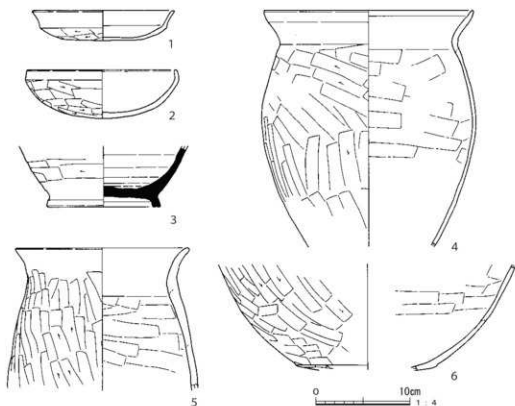


図 27 SI-13 出土遺物

表 13 SI-13 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 環	口径 (15.0) 底径 ー 器高 3.1	底部と体部との境には稜をなさない。口縁部は体部との境に稜をなしたのち外反しながら開く。	底・体部外面へラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	角閃石 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
2	土師器 環	口径 15.8 底径 ー 器高 5.1	底部は丸底。口縁部は短く内傾する。	底・体部外面へラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	角閃石・赤褐色粒 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
3	須恵器 壺	口径 ー 底径 12.0 器高 ー	高台を張り付け、端部は折り返し状になる。体部は底部からまっすぐ外方へ開く。	ロクロ整形。体部外面へラケズリ。	石英・結晶片岩 外面：灰色 内面：黄灰色	
4	土師器 甕	口径 22.0 底径 ー 器高 ー	肩部が張り、底部に向かってすぼまる。口縁部はまっすぐ外方へ開き、端部をわずかにつまみ出す。	体部外面はへラケズリ。体部内面はへラナデ。	白色・赤褐色微粒 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい褐色	
5	土師器 甕	口径 (18.4) 底径 ー 器高 ー	体部最大径を中位にもつと想定される。口縁部は外反しながら開く。	体部外面へラケズリ。体部内面へラナデ。	結晶片岩・雲母片・石英 外面：灰黄褐色 内面：にぶい褐色	
6	土師器 壺	口径 ー 底径 (14.9) 器高 ー	底部は平坦面をなさない。底部と体部との境には稜をなし、体部は内湾しながら立ち上がる。	底部・体部外面へラケズリ。体部内面へラナデ。	白色微粒・雲母片 外面：暗赤褐色 内面：にぶい赤褐色	

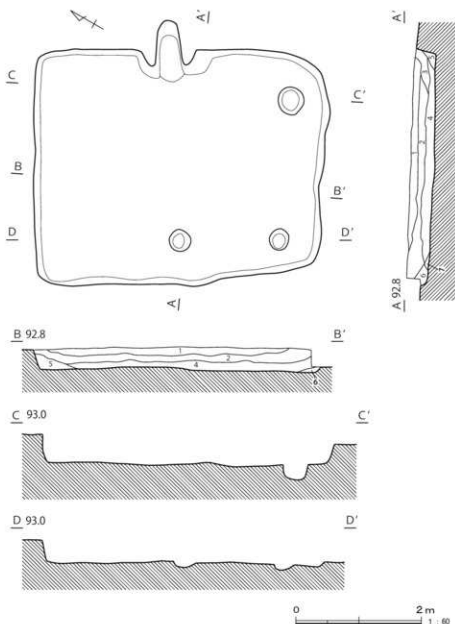
SI-14 (図28・29、表14・15/図版3)

概要 北東-南西3.7m(煙道は除く)×北西-南東4.6mを計測し、平面長方形を呈する。カマドを北東側に設け、煙道は堅穴壁面を掘り込んでいる。明瞭な主柱穴は確認されなかった。

覆土堆積状況 自然堆積と想定される。ただし上層位1~3層において焼土が多く認められた。

遺物出土状況 カマド内および住居北半部床面において土器・礫が散在していた。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器坏2点・土師器高坏1点・土師器甕8点である。土師器坏2点(1・



SI-14 土層説明

1. 暗茶褐色土 焼土粒・焼土ブロックを多量に、ローム粒・炭化物粒を微量含む。しまりあり・粘性なし。
2. 暗茶褐色土 組成は1層に類似するが、炭化物を多量に含む。
3. 茶褐色土 焼土粒・焼土ブロックを多量に含む。しまり弱い・粘性なし。
4. 明黒褐色土 白色粒子を均一に、炭化物粒・焼土粒を少量含む。しまりあり・粘性なし。
5. 明黒褐色土 焼土粒・ローム粒・炭化物粒を均一に含む。しまり弱い・粘性なし。
6. 茶褐色土 ローム粒・白色粒子・炭化物粒を少量含む。しまり弱い・粘性なし。
7. 暗黄褐色土 ロームブロック層。

図28 SI-14

2) および土師器高坏(3)は、いずれも覆土中からの出土である。1は口縁部と体部との境に強い稜をなし、口縁部が長く伸びるものである。土師器甕はいずれも口縁部が「コ」の字状を呈する。4
 以外は、カマド内から出土している。

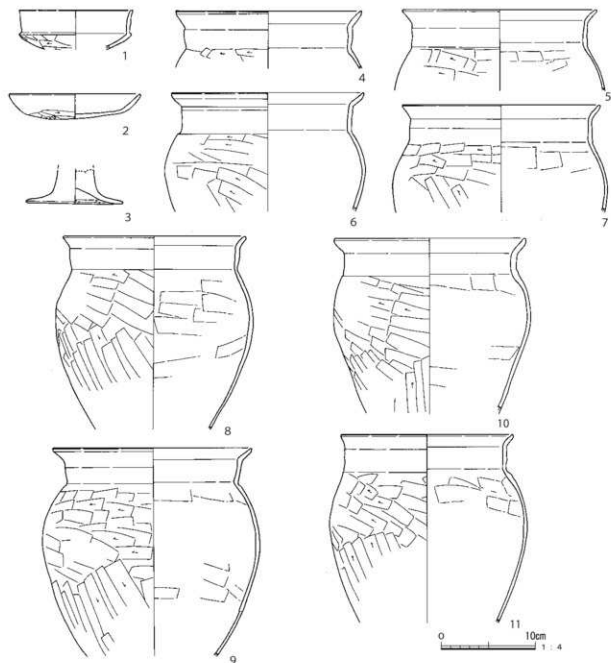


図29 SI-14出土遺物

表14 SI-14出土遺物観察表(1)

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 (12.0) 底径 — 器高 —	口縁部は底体部との境に強い稜をなし、まっすぐ立ち上がる。口縁端部は沈線状になる。	底体部はヘラケズリ。その他の他はナデ調整を基調とする。	チャート 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	

表 15 SI-14 出土遺物観察表(2)

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
2	土師器 杯	口径 14.0 底径 — 器高 2.8	底部は平坦面をなさない。 底部と体部との境には稜 をなさず、口縁部は内湾 気味に立ち上がる。	底部外面ヘラケズリ。そ の他はナデ調整を基調と する。	白色・赤褐色粒 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
3	土師器 高杯	口径 — 底径 10.3 器高 —	脚部は忠実状になり、裾 は大きく開く。	内面にヘラナデが見られ る。	赤褐色粒 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
4	土師器 甕	口径 19.7 底径 — 器高 —	口縁部は「コ」の字状を 呈する。	体部外面ヘラケズリ。そ の他はナデ調整を基調と する。	石英・赤褐色粒 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
5	土師器 甕	口径 (20.6) 底径 — 器高 —	口縁部は「コ」の字状を 呈する。肩部が張る。	体部外面ヘラケズリ。体 部内面ヘラナデ。	石英・角閃石 外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
6	土師器 甕	口径 20.4 底径 — 器高 —	口縁部は「コ」の字状を 呈する。肩部が張り、底 部に向かってすぼまる。	体部外面ヘラケズリ。そ の他はナデ調整を基調と する。	白色微粒 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
7	土師器 甕	口径 21.0 底径 — 器高 —	口縁部は「コ」の字状を 呈する。肩部が張り、底 部に向かってすぼまる。	体部外面ヘラケズリ。体 部内面ヘラナデ。	角閃石・白色微粒 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
8	土師器 甕	口径 14.3 底径 — 器高 —	口縁部は「コ」の字状を 呈する。肩部が張り、底 部に向かってすぼまる。	体部外面ヘラケズリ。体 部内面ヘラナデ。	白色微粒・赤褐色粒 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
9	土師器 甕	口径 21.0 底径 — 器高 —	口縁部は「コ」の字状を 基調とするが、わずかに 外方へ開く。肩部が張り、 底部に向かってすぼまる。	体部外面ヘラケズリ。体 部内面ヘラナデ。	石英・角閃石 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
10	土師器 甕	口径 20.3 底径 — 器高 —	口縁部は「コ」の字状を を呈する。肩部は強く張 り、底部に向かってます ぼまる。	体部外面ヘラケズリ。体 部内面ヘラナデ。	石英・赤褐色粒 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
11	土師器 甕	口径 18.2 底径 — 器高 —	口縁部は「コ」の字状を 呈する。口縁端部はあま り開かない。肩部が張り、 底部に向かってすぼまる。	体部外面ヘラケズリ。体 部内面ヘラナデ。	角閃石・赤褐色粒 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	

SI-15 (図 30・32、表 16 / 図版 4)

概要 南北 4.1 m を計測し、平面方形と想定される。炉・カマドおよびそれに伴う焼土は確認されて
いない。柱穴を四方に配するが、南西隅は不明である。SI-08 と重複しており、SI-15 → SI-08 の
先後関係が把握された。

覆土堆積状況 自然堆積と想定される。

遺物出土状況 住居南側において床面より土器片が散在していた。

遺物 図化に及んだ遺物は土師器杯 4 点・土師器甕 2 点である。1 は覆土中からの出土である。その
他は D-1 土坑周辺から出土している。古墳時代後期に位置づけられる。

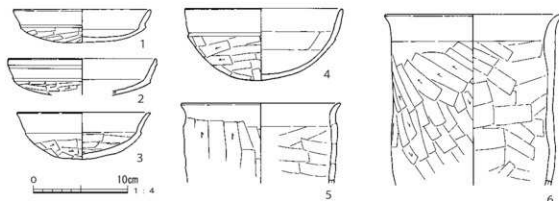


図30 SI-15出土遺物

表16 SI-15出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 14.6 底径 — 器高 3.5	底部は平坦面をなさない。 口縁部は底部部との境に 稜をなし、外方へ開く。	底部部外面へラケズリ。 その他はナデ調整を基 調とする。	雲母片 外面：赤褐色 内面：赤褐色	
2	土師器 坏	口径 (15.6) 底径 — 器高 —	口縁部には沈線を施し、 有段状をなす。	底部部外面へラケズリ。 その他はナデ調整を基 調とする。	黒色粒 外面：赤褐色 内面：明赤褐色	
3	土師器 坏	口径 14.1 底径 — 器高 4.9	底部は丸底。口縁部は底 部部との境に稜をなし、 外方へ開く。	底部部を中心にへラケズ リ。内部内面へラナデ。	結晶片岩・石英 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
4	土師器 坏	口径 16.7 底径 — 器高 7.6	底部は丸底。器形は全体 として半球形を呈する。	底部部外面へラケズリ。 内部内面へラナデ。	石英・結晶片岩 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
5	土師器 甕	口径 (6.9) 底径 — 器高 —	体部はまっすぐ伸び、口 縁部は短く外反する。	体部外面へラケズリ。 内部内面へラナデ。	石英 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
6	土師器 甕	口径 (18.7) 底径 — 器高 —	体部はまっすぐ伸び、口 縁部は短く外反する。	体部外面へラケズリ。 内部内面へラナデ。	結晶片岩・赤褐色粒 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	

SI-16 (図31・33、表17/図版4)

概要 北西-南東3.0mを計測する。北東側は溝によって損壊しているが、平面方形と想定される。南東壁においてカマドに由来すると考えられる焼土が確認された。柱穴は確認されなかった。

遺物出土状況 カマドと想定される南東壁焼土周辺において土器片が多く出土している。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器坏1点・土師器甕1点である。

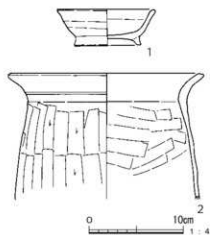
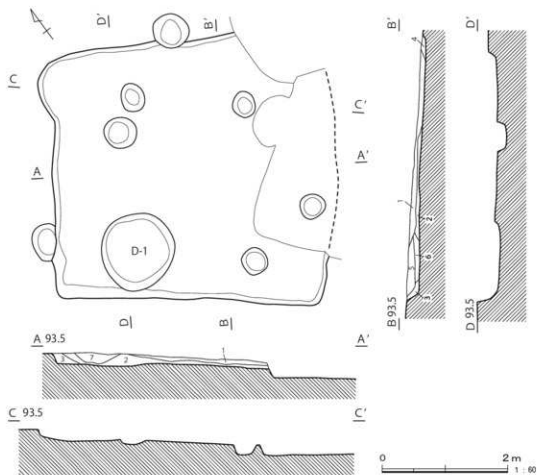


図31 SI-16出土遺物



SI-15 土層説明

1. 暗茶褐色土 焼土粒・焼土小ブロックを多量に、ローム粒・炭化物粒を微量含む。しまりあり・粘性なし。
2. 暗茶褐色土 組成は1層に類似するが、炭化物を多量に含む。
3. 茶褐色土 焼土粒・焼土ブロックを多量に含む。しまり弱い・粘性なし。
4. 明黒褐色土 白色粒子を均一に炭化物粒・焼土粒を少量含む。しまりあり・粘性なし。
5. 明黒褐色土

図 32 SI-15

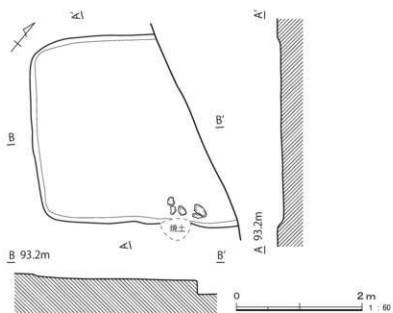


図 33 SI-16

表 17 SI-16 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 罎	口径 10.3 底径 7.0 器高 3.9	わずかに外方へ開く高台を付す。体部はわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	ロクロ整形。	雲母片 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
2	土師器 甕	口径 20.6 底径 — 器高 —	体部最大径は中位にもつと想定される。口縁部中位に沈線がめぐる。	体部外面へラケズリ。体部内面へラナデ。	白色粒・角閃石 外面：にぶい赤褐色 内面：暗赤褐色	

SI-17 (図 34)

概要 東西 4.6 m × 南北 4.4 m を計測し、おおよそ平面方形を呈する。カマドは西側に設けられ、煙道は長く伸びない。貯蔵穴状の土坑がカマド北脇で確認された。柱穴は四方に配しているが、北西隅のものは検出されなかった。SI-13 と重複し、SI-17 → SI-13 の先後関係が把握された。

覆土堆積状況 自然堆積と想定される。

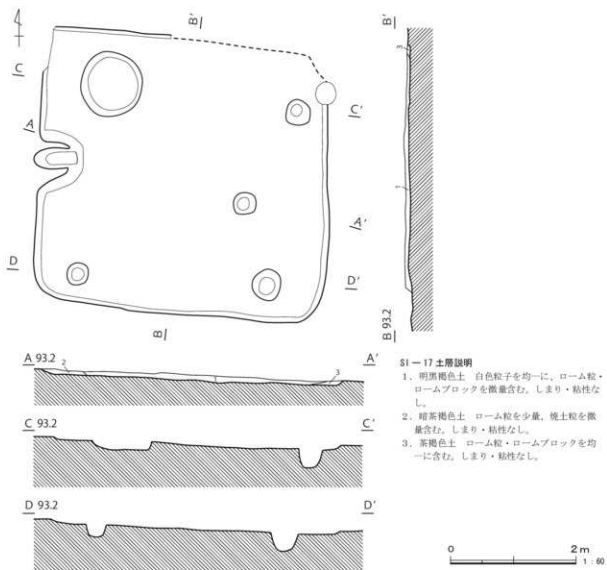


図 34 SI-17

遺物出土状況 カマド内より土器片が出土した。

遺物 図化に及んだ遺物はない。

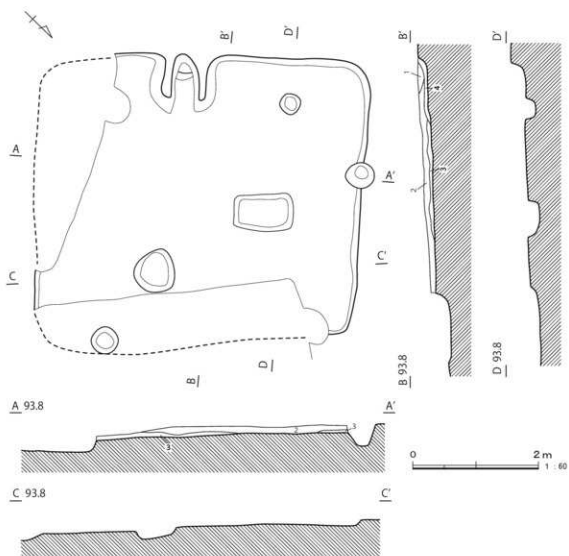
SI-18 (図 35)

概要 北西-南東 5.2 m × 北東-南西 4.6 m を計測し、平面長方形を呈する。カマドは南西壁に設けられる。その奥壁は住居壁より手前にあり、煙道は竪穴外へは伸びない。明瞭な柱穴は確認されなかった。SI-07・SI-15 と重複し、SI-18 → SI-07・SI-15 の先後関係を把握された。

覆土堆積状況 自然堆積と想定される。

遺物出土状況 遺物はほとんど出土していない。

遺物 図化に及んだ遺物はない。



SI-18 土層説明

1. 暗褐色土 粘土粒・粘土ブロックを多量に含む。しまり弱い・粘性なし。
2. 暗茶褐色土 ローム粒・焼土粒を微量含む。しまり・粘性なし。
3. 明黒褐色土 ローム微粒・炭化物粒を微量含む。しまり弱い・粘性なし。
4. 明黒褐色土 焼土粒・ローム粒・炭化物粒を多量に含む。しまり弱い・粘性なし。

図 35 SI-18

SI-19 (図 36・37、表 18 / 図版 4)

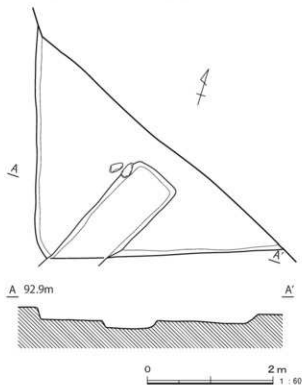


図 36 SI-19

概要 大半が調査区外のため、その規模は不明である。おおよそ平面方形と想定される。炉・カマドといった燃焼施設は確認されていない。柱穴は検出されなかった。SI-22と重複し、SI-19→SI-22の先後関係が把握された。

覆土堆積状況 SI-22によって損壊しており、その堆積状況の把握には至らなかった。

遺物出土状況 床面からは土器片・礫が散在していたが、南東壁前面において土器片がまとまって出土した。

遺物 図化に及んだ遺物は、須恵器坏 1点である。住居覆土中より出土している。

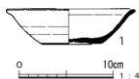


図 37 SI-19 出土遺物

表 18 SI-19 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 坏	口径 (13.7) 底径 6.3 器高 3.7	底部は平底。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外方へ開く。	ロクロ整形。底は回転糸切り。	石英 外面：黒褐色 内面：黒褐色	

SI-20 (図 38・39、表 19 / 図版 4)

概要 東西 4.1 m を計測する。南半は調査区外であるが、平面方形と想定される。カマドは北東方向に設ける。カマド奥壁は住居壁手前あたり、煙道は竪穴外へは伸びない。貯蔵穴状の土坑がカマド東脇に設ける。柱穴は検出されなかった。

遺物出土状況 カマドおよびカマド東脇土坑から土器片が多く出土している。

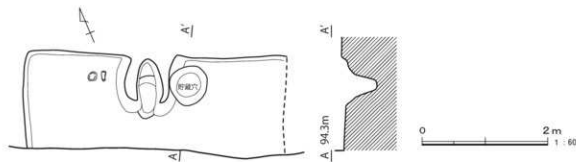


図 38 SI-20

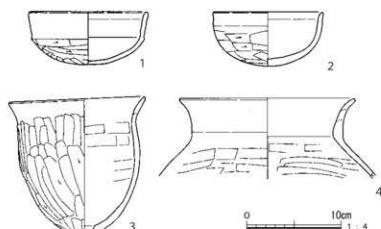


図 39 SI-20 出土遺物

遺物 図化に及んだ異物は、土師器坏 2 点・土師器瓶 1 点・土師器甕 1 点である。1 は貯蔵穴覆土中から、2・3 はカマドおよび貯蔵穴から、4 は貯蔵穴より出土している。古墳時代後期に位置づけられる。

表 19 SI-20 出土遺物観察表

№	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 12.6 底径 — 器高 5.6	底部は丸底。口縁部は体部との境に線をなしたのち、外方へ開く。	底体外面へラケズリ。口縁端部内面にナデを巡らせる。	白色微粒・角閃石 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
2	土師器 坏	口径 (11.6) 底径 — 器高 5.6	底部は丸底で、内湾しながら立ち上がったのち、口縁部はわずかに外傾する。	底体外面へラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	石英 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい褐色	
3	土師器 瓶	口径 14.4 底径 3.6 器高 14.2	底には 1 孔を穿つ。底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	体外外面へラケズリ。体内内面へラナデ。	石英・赤褐色粒 外面：赤褐色 内面：赤褐色	
4	土師器 甕	口径 18.6 底径 — 器高 —	口縁部は外反する。	肩部内外面ともにへラナデ。	石英 外面：赤褐色 内面：赤褐色	

SI-21 (図 40)

概要 北西-南東 4.1 m × 北東-南西 3.9 m を計測し、平面正方形を呈する。カマドは南東壁北寄りに設ける。煙道は壁穴外へ伸びない。柱穴は住居南西側に 2 基検出された。カマド前面に貯蔵穴状の土坑が確認された。

覆土堆積状況 自然堆積と想定されるが、焼土を多く包含する。

遺物出土状況 カマドから土器片が少量出土している。

遺物 図化に及んだ遺物はない。

SI-22 (図 41・42、表 20・21 / 図版 4)

概要 北西-南東 5.4 m を計測する。北半は調査区外にあたるが、平面方形と想定される。炉・カマドといった燃焼施設は確認されていない。柱穴は 2 基検出された。SI-19 と重複し、SI-19 → SI-22 の先後関係が把握された。

覆土堆積状況 自然堆積と想定されるが、覆土中には焼土を包含する。

遺物出土状況 床面からは土器片・礫が散在して出土した。礫には台石状のものも認められた。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器杯4点・土師器甕1点・須恵器杯1点である。いずれも覆土中からの出土であり、5は掘り方出土の破片を含んでいる。

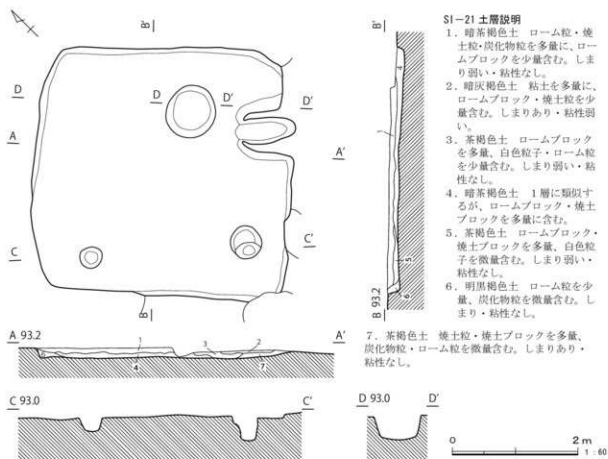


図 40 SI-21

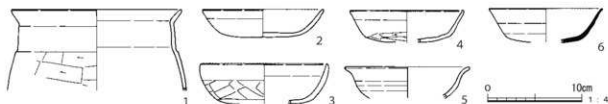


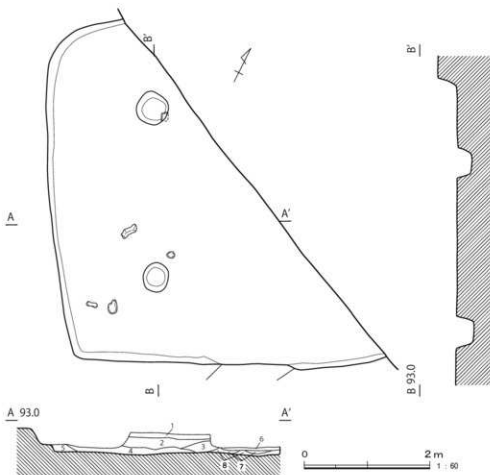
図 41 SI-22 出土遺物

表 20 SI-22 出土遺物観察表 (1)

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器甕	口径 18.0 底径 — 器高 —	口縁部は「コ」の字状をなす。	体部外面へラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	石英 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
2	土師器杯	口径 12.8 底径 2.9 器高 —	底部は平坦面をなすが、体部との境は明瞭ではない。口縁部はまっすぐ外方へ開く。	口縁部にナデをめぐる。	角四石 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい褐色	

表 21 S1-22 出土遺物観察表 (2)

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
3	土師器 環	口径 (13.3) 底径 (10.0) 器高 4.3	底部はヘラケズリによって作出する。口縁部に向かって内湾しながら立ち上がる。	底部外面ヘラケズリ。体部ヘラケズリ。口縁部ナデ。	角閃石 外面：橙色 内面：橙色	
4	土師器 環	口径 (12.0) 底径 — 器高 3.3	底部は平らな面をなさず、口縁部はまっすぐ外方へ開く。口縁端部は短く内斜する。	底部外面ヘラケズリ。	角閃石 外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
5	土師器 環	口径 (13.2) 底径 — 器高 —	体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	ロクロ整形。	褐色粒 外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	
6	須恵器 環	口径 (12.0) 底径 — 器高 —	底部と体部との境は稜をなさず丸く立ち上がる。口縁部はまっすぐ外方へ開く。	ロクロ整形。底は回転糸切り。	石英 外面：黄灰色 内面：黄灰色	



S1-22 土層説明

1. 暗茶褐色土 ローム粒を少量、焼土粒・炭化物粒を微量含む。しまり弱い・粘性なし。
2. 明黒褐色土 ローム粒・焼土粒を均一に、焼土ブロック・炭化物粒を微量含む。しまり弱い・粘性なし。
3. 茶褐色土 焼土粒・炭化物を少量、ローム粒を微量含む。しまりあり・粘性なし。
4. 暗茶褐色土 ローム粒を均一に、ロームブロック・白色粒を微量含む。しまりあり・粘性なし。
5. 明黒褐色土 ロームブロックを微量含む。しまり・粘性なし。
6. 褐色土 19号住居跡床面。焼土粒・炭化物粒を均一に含む。硬質、粘性なし。
7. 黒褐色土 炭化物粒を多量に、ローム粒を少量含む。しまり弱い・粘性なし。
8. 暗茶褐色土 ローム粒・白色粒子を微量含む。しまり強い・粘性弱い。

図 42 S1-22

SI-23 (図 43)

概要 南北 3.4 m を計測する。大半は調査区外であるが、平面方形と想定される。炉・カマドといった燃焼施設は検出されなかった。貯蔵穴状の土坑が北壁前面で確認された。柱穴は検出されていない。

遺物出土状況 遺物はほとんど出土してない。

遺物 図化に及んだ遺物はない。

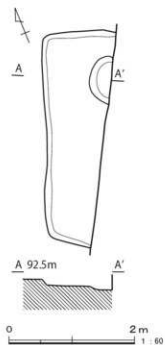


図 43 SI-23

SI-24 (図 44・45、表 22 / 図版 4)

概要 南北 5.1 m を計測する。東半は調査区外であるが、平面方形と想定される。カマドを西壁に設ける。煙道は壁外へ伸びる。住居南西隅には貯蔵穴状の土坑が確認された。柱穴状のピットは 1 基確認された。

覆土堆積状況 自然堆積と想定される。

遺物出土状況 カマド内およびカマド南脇において土器片がまとめて出土した。

遺物 図化に及んだ遺物は土師器甕 3 点である。いずれもカマド内より出土している。

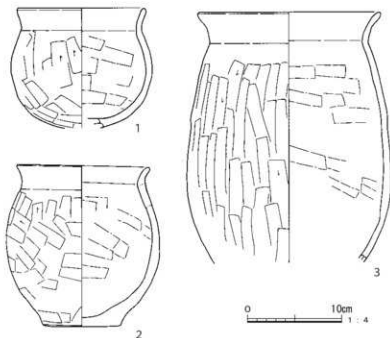


図 44 SI-24 出土遺物

表 22 SI-24 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 鉢	口径 (13.6) 底径 — 器高 —	球形の体部を有し、頸部は緩やかに外反して口縁部はまっすぐ開く。	体部外面ヘラケズリ。体部内面ヘラナデ。口縁部にナデをめぐらせる。	石英 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
2	土師器 小形甕	口径 14.0 底径 8.2 器高 17.2	底部は平底。頸部は緩やかに外反して口縁部に至る。	体部外面ヘラケズリ。体部内面ヘラナデ。口縁部にナデをめぐらせる。	石英・赤褐色粒 外面：明赤褐色 内面：黒褐色	
3	土師器 甕	口径 (19.3) 底径 — 器高 —	体部最大径を下半にもつ。口縁部は外反しながら開く。	体部外面ヘラケズリ。体部内面ヘラナデ。口縁部にナデをめぐらせる。	石英・赤褐色粒 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	

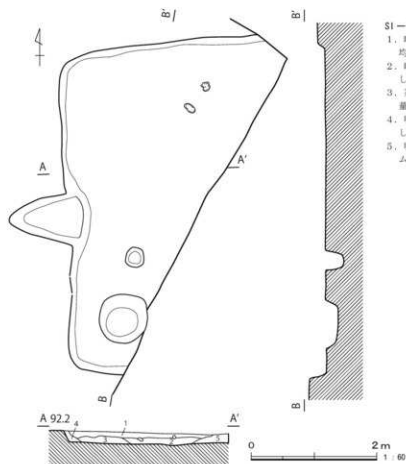


図 45 SI-24

SI-24 土層説明

1. 暗茶褐色土：焼土粒・ローム粒・白色粒子を均一に、炭化物粒を微量含む。しまり・粘性弱い。
2. 暗茶褐色土：ローム粒・炭化物粒を少量含む。しまり弱い・粘性なし。
3. 茶褐色土：白色粒子・焼土粒・ローム粒を少量含む。しまり弱い・粘性なし。
4. 明黒褐色土：焼土粒・白色粒子を微量含む。しまり・粘性弱い。
5. 明黒褐色土：焼土粒・炭化物粒を少量、ローム粒を微量含む。しまり弱い・粘性なし。

SI-25 (図 46・47、表 22 / 図版 5)

概要 北西-南東 3.5 m を計測する。平面方形と想定される。焼土が北東側床面において確認された。南西側で柱穴状のビットが 2 基検出された。

覆土堆積状況 自然堆積と想定されるが、中層位 3 層位において焼土を多量に包含する。

遺物出土状況 床面焼土周辺においてまとまって土器片が出土している。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器高環 1 点・土師器甕 1 点である。いずれも焼土周辺から出土している。古墳時代後期に位置づけられる。

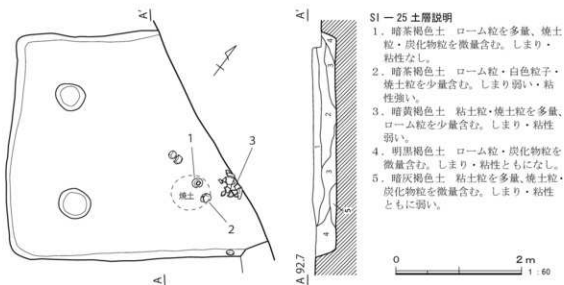


図46 SI-25

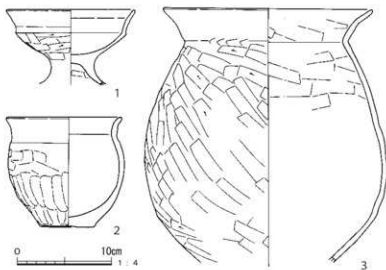


図47 SI-25 出土遺物

SI-26 (図48・49、表23/図版5)

概要 東西3.1m×南北4.5mを計測し、平面長方形を呈する。カマドは西壁南寄りに設け、その煙道は竈穴外へ伸びる。柱穴・貯蔵穴は認められなかった。

遺物出土状況 住居中央床面において土器片・礫がまとまって出土した。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器壺1点である。床面より出土している。

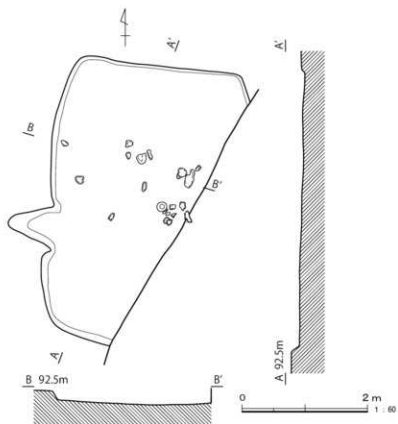


図 48 SI-26

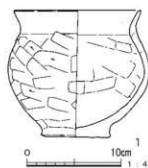


図 49 SI-26 出土遺物

表 23 SI-26 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 小形甕	口径 13.4 底径 7.3 器高 13.5	突出する平底の底部を有する。体部は球形を呈し、口縁部はわずかに開く。	体部外面ヘラケズリ。底部との境にはヘラナデが見られる。体部内面ヘラナデ。	石英・結晶片岩 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	

SI-27 (図 50・51、表 24 / 図版 5)

概要 北西-南東 3.1 m を計測する。北半は調査区外であるが、平面方形と想定される。炉・カマドといった燃焼施設は確認されなかった。柱穴は検出されていない。

遺物出土状況 南西壁際より甕が出土している。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器坏 1 点・土師器甕 1 点である。1 は住居覆土中より、2 は南西壁際床面より出土している。

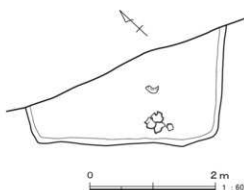


図 50 SI-27

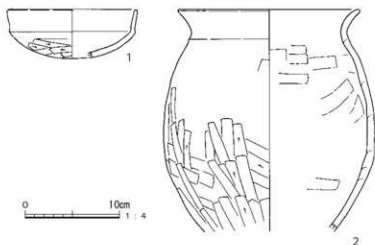


図 51 SI-27 出土遺物

表 24 SI-27 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 (13.6) 底径 — 器高 (5.2)	底部は丸底。体部と口縁部との境には稜をなし、口縁はごくわずかに開く。	底部を中心にヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	石英・結晶片岩 外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
2	土師器 甕	口径 (19.2) 底径 — 器高 —	体部最大径を中位にもつ。頸部は丸く屈曲し、口縁部はまっすぐ開く。	体部外面は下半を中心にヘラケズリ。体部内面ヘラナデ。	石英・結晶片岩 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	

SI-28 (図 52・53・54、表 25・26 / 図版 5・6・7)

概要 東西 3.8 m × 南北 4.3 m を計測し、平面方形を呈する。カマドを西壁に設け、煙道は住居壁をわずかに掘り込む。柱穴は検出されていない。SI-14・SI-27 と切り合っている。出土遺物の帰属から SI-27 → SI-28 → SI-14 の先後関係が想定されるものの、遺構調査時にはその先後関係は把握できなかった。

遺物出土状況 カマド前面およびカマド北脇において多量の土器が出土している。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器坏 6 点・土師器高坏 1 点・土師器甕 10 点である。カマド内からは土師器坏 3・5、土師器高坏 7、土師器甕 8・9・10・11・13・15・16・17

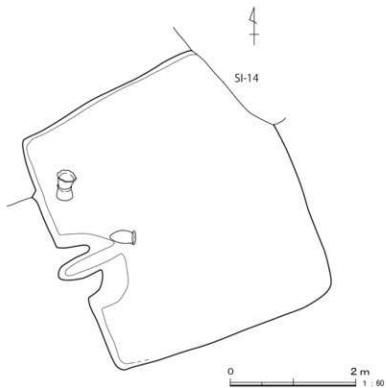


図 52 SI-28

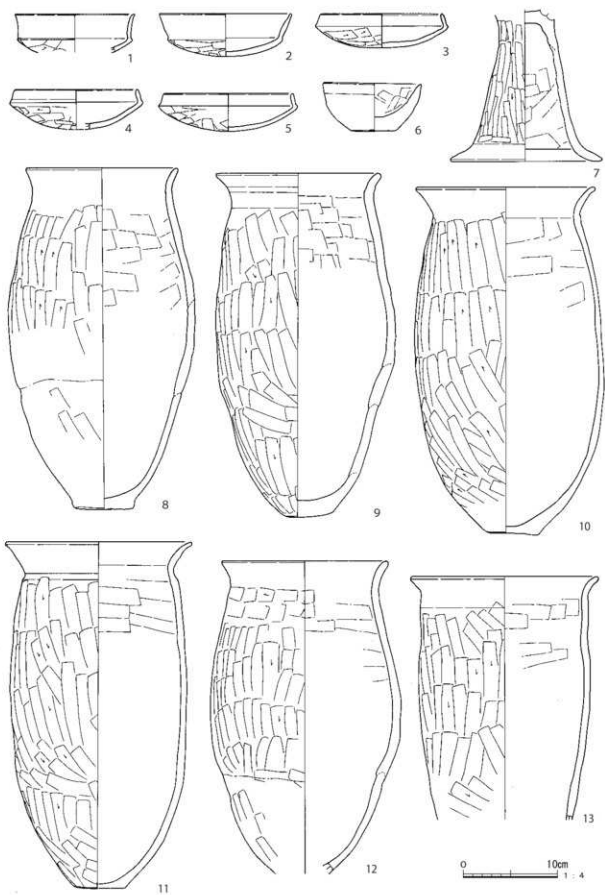


图 53 S1-28 出土遗物 (1)

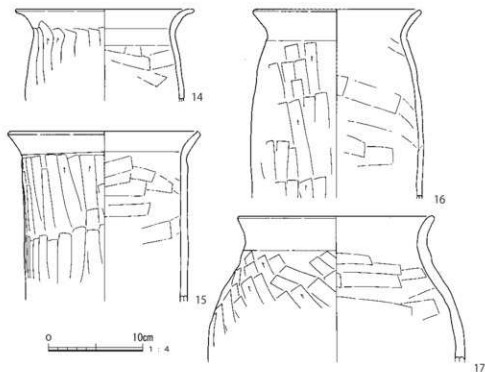


図 54 S1-28 出土遺物 (2)

表 25 S1-28 出土遺物観察表 (1)

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 杯	口径 (12.6) 底径 — 器高 —	体部と口縁部との境は強い稜をなし、口縁は外反気味に直立する。	底体部外面ヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	白色微粒・角閃石 外面：赤褐色 内面：褐色	
2	土師器 杯	口径 (13.9) 底径 — 器高 4.5	底部は丸底。口縁部との境には稜をなし、口縁はまっすぐ外方へ開く。	底体部外面ヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	白色微粒・角閃石 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
3	土師器 杯	口径 (12.8) 底径 — 器高 3.6	底部は丸底。口縁部は体部との境に稜をなしたのち、内傾する。	底体部外面ヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	角閃石 外面：黒色 内面：にぶい褐色	
4	土師器 杯	口径 13.0 底径 — 器高 4.2	底部は丸底。口縁部は体部との境に稜をなしたのち、内傾する。	底体部外面ヘラケズリ。口縁部に強いナデをめぐらせる。	角閃石 外面：黒褐色 内面：黒褐色	
5	土師器 杯	口径 (13.5) 底径 — 器高 4.0	底部は丸底。口縁部は体部との境に稜をなしたのち、内傾する。	底体部外面ヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	白色微粒・角閃石 外面：にぶい褐色 内面：にぶい褐色	
6	土師器 杯	口径 10.0 底径 4.7 器高 5.1	底部は平底。口縁に向かってわずかに内湾しながら開く。	底に木葉痕。体部内面ヘラナデ。その他はナデ調整を基調とする。	石英・結晶片岩 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
7	土師器 高杯	口径 — 底径 (16.0) 器高 —	脚部はまっすぐ開き、裾に向かって大きく開く。	脚部外面ヘラケズリ。裾部にはナデをめぐらせる。脚部内面ヘラナデ。	白色微粒・赤褐色粒 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
8	土師器 甕	口径 16.0 底径 6.2 器高 36.4	底部は突出する平底をなす。体部中位に最大径を有する。口縁部は緩やかに屈曲し、わずかに開く。	体部外面ヘラケズリ。体部内面ヘラナデ。	石英・結晶片岩 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい褐色	

表 26 SI-28 出土遺物観察表 (2)

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
9	土師器 甕	口径 17.4 底径 5.0 器高 36.4	底部は平底をなすが正置できない、体部中に最大径をなす。口縁部は短く外反する。	体部外面ヘラケズリ。体部内面ヘラナデ。	石英・結晶片岩・赤褐色色粒 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
10	土師器 甕	口径 18.9 底径 5.4 器高 36.8	底部は平底。体部は砲弾形を呈する。口縁部はわずかに外反しながら開く。	体部外面ヘラケズリ。体部内面ヘラナデ。	石英・チャート 外面：灰褐色 内面：灰黄褐色	
11	土師器 甕	口径 19.7 底径 5.3 器高 36.7	底部は平底。体部は砲弾形を呈する。口縁部はわずかに外反しながら開く。	体部外面ヘラケズリ。体部内面ヘラナデ。	石英・結晶片岩 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
12	土師器 甕	口径 17.5 底径 — 器高 —	体部は中位が張る。口縁部は緩やかに外反しながら開く。	体部外面ヘラケズリ。体部内面ヘラナデ。	石英・赤褐色色粒 外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
13	土師器 甕	口径 (19.8) 底径 — 器高 —	体部は張らず、寸胴形を呈する。口縁部は強く外反して短く開く。	体部外面ヘラケズリ。体部内面ヘラナデ。	石英・チャート 外面：黒褐色 内面：暗赤褐色	
14	土師器 甕	口径 (18.8) 底径 — 器高 —	口縁部は強く外反する。	体部外面ヘラケズリ。体部内面ヘラナデ。	石英・結晶片岩 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
15	土師器 甕	口径 20.4 底径 — 器高 —	体部は張らず寸胴形を呈する。口縁部はまっすぐ外方へ開く。	体部外面ヘラケズリ。体部内面ヘラナデ。	石英・チャート 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
16	土師器 甕	口径 17.8 底径 — 器高 —	体部はわずかに張る。口縁部はまっすぐ外方へ開く。	体部外面ヘラケズリ。体部内面ヘラナデ。	石英・チャート 外面：灰褐色 内面：灰褐色	
17	土師器 甕	口径 (20.8) 底径 — 器高 —	肩部が張り、口縁部は緩やかに外反する。	体部外面ヘラケズリ。体部内面ヘラナデ。	石英・赤褐色色粒 外面：にぶい橙色 内面：にぶい赤褐色	

が出土している。その他 2・11・14 は住居床面から出土している。1・4・6 は住居覆土中からの出土である。古墳時代後期に位置づけられる。

SI-29 (図 55・57、表 27/図版 7)

概要 平面規模は不明である。炉・カマドおよびそれに伴う焼土も確認されていない。SI-30→SI-29→SI-24・SI-27・SI-28 の先後関係を把握された。

遺物出土状況 遺物はほとんど出土していない。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器坏 1 点である。住居覆土中からの出土である。古墳時代後期に位置づけられる。

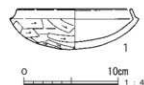


図 55 SI-29 出土遺物

表 27 SI-29 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 12.2 底径 — 器高 12.2	底部は丸底で、口縁部との境には強い稜をなす。口縁部は内傾する。	底体部外面ヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	角閃石・白色微粒 外面：暗赤褐色 内面：黒褐色	

SI-30 (図 56・57、表 28 / 図版 7)

概要 平面規模は不明である。おおよそ平面方形と推定される。カマドを南壁に設ける。カマド奥壁は住居壁の手前にあり、煙道は堅穴外へは伸びない。柱穴は検出されていない。SI-24・SI-28・SI-29・SI-31と重複しており、SI-31→SI-30→SI-24・SI-28・SI-29の先後関係が把握された。

遺物出土状況 カマド内より土器片が少量出土している。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器 4 点である。いずれも覆土中からの出土である。古墳時代後期に位置づけられる。

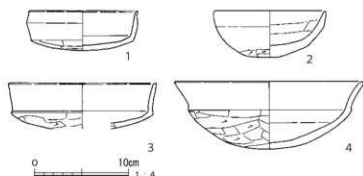


図 56 SI-30 出土遺物

表 28 SI-30 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 杯	口径 11.5 底径 — 器高 4.2	底部は丸底で、口縁部との境には稜をなす。口縁部は中位が張り、端部は内斜する。	底体部外面へラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	石英・白色微粒・赤褐色粒 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
2	土師器 杯	口径 11.8 底径 — 器高 4.9	底部は丸底で、口縁に向かって内湾しながら立ち上がる。	底体部外面へラケズリ。体部内面にヘラナデが見られる。	雲母片 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい黄褐色	
3	土師器 杯	口径 (15.6) 底径 — 器高 —	底部は丸底で、口縁部との境には稜をなす。口縁は外方へ開き、端部はわずかに面をなす。	底体部外面へラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	石英・角閃石 外面：橙色 内面：橙色	
4	土師器 鉢	口径 20.0 底径 — 器高 7.2	底部は丸底で、口縁部との境には稜をなす。口縁は外反しながら開く。	底体部外面へラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	白色粒・赤褐色粒 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	

SI-31 (図 57)

概要 平面規模は不明である。その形態は方形が想定される。炉・カマドおよびそれに伴う焼土は確認されなかった。SI-28・SI-30と重複し、いずれの遺構にも切られている。

遺物出土状況 遺物は出土していない。

遺物 図化に及んだ遺物はない。帰属時期は不明である。

SI-32 (図 58・59、表 29 / 図版 7)

概要 東西 3.2 m を計測する。平面方形を呈すると想定される。東壁に焼土が検出され、そこから土器片が多量に出土しており、カマドの痕跡と推定される。柱穴および貯蔵穴は確認されなかった。SI-33と重複しており、SI-33→SI-32の先後関係が把握された。

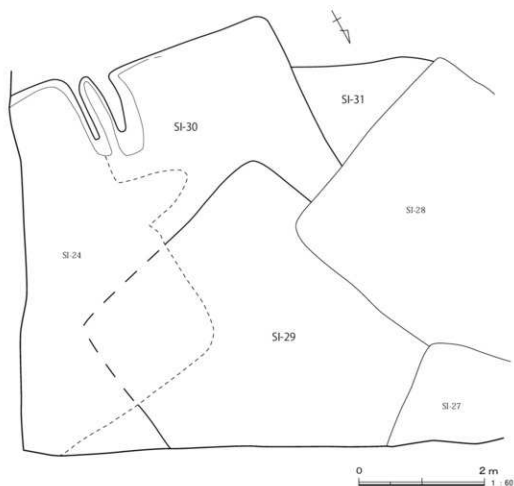


図 57 SI-29・30・31

遺物出土状況 カマドと想定される焼土周辺からまとまって土器片が出土した。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器甕 3 点である。ただし 1・2 は同一個体である可能性がある。いずれも床面からの出土である。

SI-33 (図 58・60、表 30・31 / 図版 7・8)

概要 平面規模は不明。平面形態は方形と想定される。床面より焼土が一ヶ所からまとまって検出されている。出土した土師器甕 (5) の外面には粘土が付着しており、カマドの存在が想定される。柱穴は確認されていない。SI-32 と重複しており、SI-32 → SI-33 の先後関係が把握された。

遺物出土状況 床面より土器片が散在して出土している。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器甕 6 点・土師器坏 3 点である。3・4 は住居覆土中からの出土である。その他は床面から出土している。長胴甕を主体としており、坏には有段口縁が認められる。

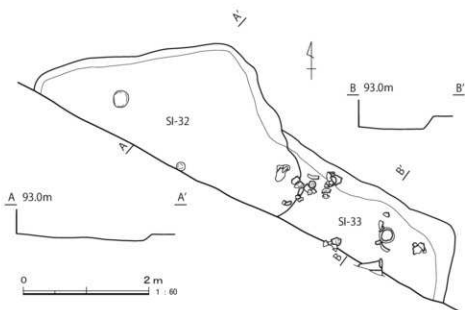


図58 SI32・33

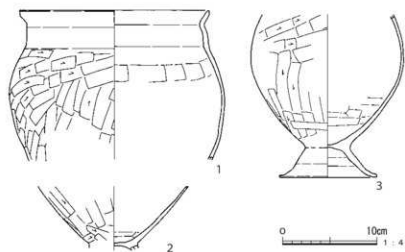


図59 SI-32出土遺物

表 29 SI-32 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 甕	口径 20.0 底径 — 器高 —	口縁部は「コ」の字状を呈する。	体部外面ヘラケズリ。体部内面にヘラナデが見られる。	白色微粒・角閃石 外面：赤褐色 内面：赤褐色	
2	土師器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	体部下半。台部欠損。体部下半はほぼまっすぐに外方へ開く。	体部外面ヘラケズリ。体部内面底にヘラナデが見られる。	白色微粒・角閃石 外面：黒褐色 内面：明赤褐色	
3	土師器 甕	口径 — 底径 10.3 器高 —	体部は上位に最大径をもつ。台部は外反しながら開く。	体部外面ヘラケズリ。体部内面にヘラナデが見られる。	白色微粒・角閃石 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい褐色	

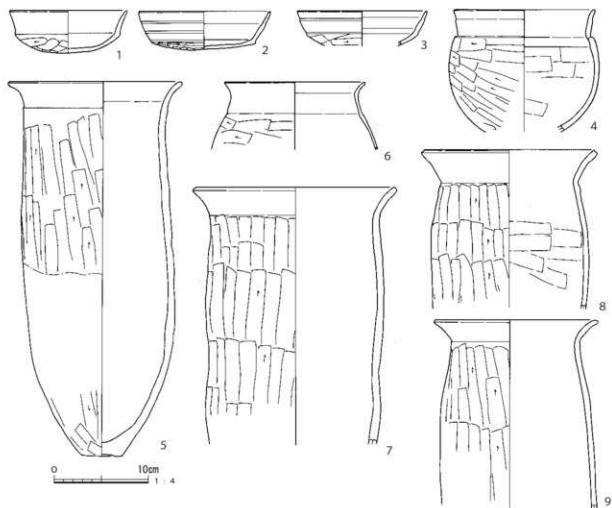


図 60 SI-33 出土遺物

表 30 SI-33 出土遺物観察表 (1)

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 杯	口径 12.4 底径 — 器高 4.5	底部は丸底で、口縁部との境に稜をなす。口縁部は外反しながら開く。	底体外面ヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	チャート 外面：にぶい橙褐色 内面：にぶい橙褐色	
2	土師器 杯	口径 13.9 底径 — 器高 4.1	底部は丸底で、口縁部との境に稜をなす。口縁部は沈線を2条施し、有段状をなす。	底体外面ヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	白色微粒 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
3	土師器 杯	口径 (13.6) 底径 — 器高 —	口縁部は端部を撞壁することによって有段状をなす。	底体外面ヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	白色・赤褐色微粒 外面：灰褐色 内面：灰褐色	
4	土師器 鉢	口径 (14.8) 底径 — 器高 —	体部は球形をなし、口縁部との境に強い稜をなす。口縁部はまっすぐ外方へ開き、端部は撞壁される。	体部外面ヘラケズリ。体部内面ヘラナデ。底には木葉痕を残す。	白色微粒・角閃石 外面：黒褐色 内面：黒褐色	
5	土師器 甕	口径 18.3 底径 4.2 器高 39.6	底部は平底。体部は歪らず、寸胴形を呈する。口縁部は体部との境に稜をなしたのち外反しながら開く。	体部外面ヘラケズリ。下半には粘土が付着する。	チャート 外面：にぶい赤褐色 内面：灰褐色	

表 31 SI-33 出土遺物観察表 (2)

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
6	土師器 甕	口径 14.8 底径 — 器高 —	口縁部は緩やかな「コ」の字状をなす。	体部外面ヘラケズリ。	白色微粒・角閃石 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
7	土師器 甕	口径 (21.5) 底径 — 器高 —	体部は張らず、寸胴形を呈する。口縁部は外反しながら開く。	体部外面ヘラケズリ。	石英・赤褐色粒 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
8	土師器 甕	口径 (18.6) 底径 — 器高 —	体部は寸胴形を呈し、頸部に向かってわずかにすばまる。口縁部は大きく開き、端部には沈線がめぐる。	体部外面ヘラケズリ。 体部内面ヘラナデ。	石英・赤褐色粒 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
9	土師器 甕	口径 (17.3) 底径 — 器高 —	体部は寸胴形を呈し、頸部に向かってわずかにすばまる。口縁部は大きく開く。	体部外面ヘラケズリ。	石英・チャート 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	

SI-34 (図 61・63、表 32 / 図版 8)

概要 北西-南東 4.2 m を計測する。平面形態は方形を呈すると想定される。カマドは北東に設け、住居壁を掘り込んで構築される。貯蔵穴がカマド脇、住居東隅に設けられる。柱穴は確認されなかった。SI-35 と重複し、SI-35 → SI-34 の先後関係が把握された。

遺物出土状況 カマド内および貯蔵穴内から土器片が出土している。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器坏 2 点・土師器甕 1 点である。1・2 はカマド内から、3 は貯蔵穴から出土している。古墳時代後期に位置づけられる。

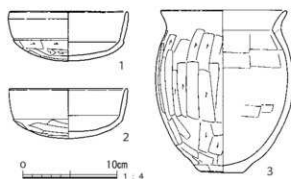


図 61 SI-34 出土遺物

表 32 SI-34 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 坏	口径 12.6 底径 — 器高 5.2	底部は丸底で、口縁部との境には明瞭な稜をなす。口縁部は内湾気味に立ち上がる。	底体部外面ヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	雲母片 外面：にぶい褐色 内面：にぶい赤褐色	
2	土師器 坏	口径 12.6 底径 — 器高 5.2	底部は丸底で、口縁部との境には稜をなす。口縁部はまっすぐ開く。	底体部外面ヘラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	白色粒 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	
3	土師器 甕	口径 13.3 底径 4.3 器高 17.1	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がる。口縁部はわずかに外反してまっすぐ開く。頸部内面には稜をなす。	底部・体部外面ヘラケズリ。体部内面にはヘラナデが見られる。	結晶片岩・石英 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	

SI-35 (図 62・63、表 33 / 図版 8)

概要 東西 3.8 m を計測し、平面方形を呈すると想定される。カマド状の住居壁からの掘り込みが北壁西寄りで確認された。柱穴は検出されなかった。SI-34 と重複し、SI-35 → SI-34 の先後関係が把握された。

遺物出土状況 床面からは礫が出土した程度である。

遺物 図化に及んだ遺物は、土師器坏 1 点・土師器甕 1 点である。いずれも住居覆土中から出土している。

表 33 SI-35 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器坏	口径 9.7 底径 5.4 器高 2.8	底部は平底で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は外反して開く。	ロクロ整形。底部回転糸切り。	雲母片 外面：明赤褐色 内面：明赤褐色	
2	土師器甕	口径 (13.0) 底径 — 器高 —	体部は球形で、頭部は直立気味になる。口縁部は外反しながら開く。	体部外面へラケズリ。体部内面にはヘラナデが見られる。	結晶片岩・石英 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	

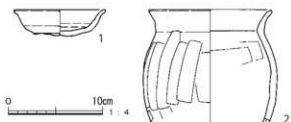


図 62 SI-35 出土遺物

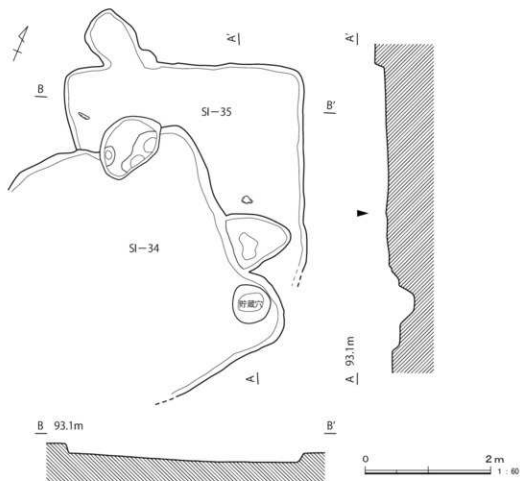


図 63 SI-34・35

SI-36 (図 64・65、表 34 / 図版 8)

概要 平面規模は不明である。平面形態は方形を呈すると想定される。貯蔵穴状の土坑が 1 基確認されている。柱穴は検出されていない。

遺物出土状況 床面より土器・土器片がまとまって出土している。

遺物 図化におよんだ遺物は土師器環 2 点である。いずれも床面からの出土である。古墳時代後期に位置づけられる。

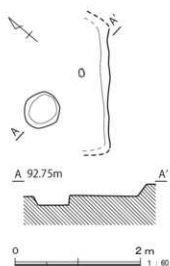


図 64 SI-36

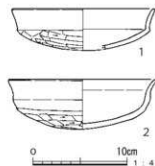


図 65 SI-36 出土遺物

表 34 SI-36 出土遺物観察表

No.	器種	法量 (cm)	器形・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 環	口径 15.0 底径 — 器高 4.4	底部は丸底で、口縁部との境には稜をなす。口縁部は外反しながら開く。	底体部外面へラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	白色粒・角閃石 外面：赤褐色 内面：赤褐色	
2	土師器 環	口径 15.6 底径 — 器高 5.2	底部は丸底で、口縁部との境には稜をなす。口縁部は「S」の字状に立ち上がる。	底体部外面へラケズリ。その他はナデ調整を基調とする。	石英・赤褐色粒 外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色	

V まとめ

本調査 (B 地点) では古墳時代後期および古代の住居跡が 36 棟確認されている。そのうち出土遺物等から古墳時代後期に位置づけられるものは 16 棟あり、その後 10 世紀に至るまで断続的に集落が営まれていたことがわかる。奈良時代になると、住居跡が減少する状況は、周辺の遺跡の動態と一致している。B 地点の住居跡の分布をみると、長期間にわたって密集する箇所と住居跡が全く構築されていない箇所がある。その理由については、明らかにはできなかったが、前代の堅穴を再利用した形跡は認められず、比較的短期間に住居跡が埋没する状況であったと想定される。また調査区内の微地形については把握できなかったが、そのような微細な標高差が反映している可能性もある。

古墳時代後期の住居跡において、カマドが確認された住居跡では、SI-20・SI-34 のように北カマドを有するものの他に、SI-10・SI-24 のような西カマドや SI-28・SI-30 のような南カマドを設ける

ものがある。北カマドのSI-20・SI-34では、カマド右脇に貯蔵穴を設け、西カマドのSI-10・SI-24では貯蔵穴をカマド左脇、住居南西隅に貯蔵穴を設けており、両者は住居構造が大きく異なることが想定される。なお南カマドのSI-28・SI-30では、いずれも貯蔵穴は確認されていない。

その他、明確なカマドが検出されていないものがあるが、焼土を多く含む覆土が堆積していることなどから、大きく破壊された可能性も考えられる。しかし、カマドが確認されていないものは、SI-15を除いて貯蔵穴が認められておらず、カマドが認められた住居跡と住居構造が異なる可能性が推測される。またカマドも本来的になかったか、その構造が異なっていることも考えられる。なおカマド位置の違いは明確な時期差ではないようである。

古代の住居跡では、時期比定の困難なものが多かったが、SI-01・SI-14ではそれぞれ東カマド・北カマドが設けられている。その住居形態は、古墳時代後期が平面正方形を基調としていたのに対して、古代では平面横長方形を呈している。このようにB地点の調査成果は、周辺遺跡の様相と一致しており、今後はその空間的広がりとの有機的関係を把握する必要がある。

引用・参考文献

- 恋河内昭彦(1987)『秋山東遺跡』児玉町調査会報告第2集
- 恋河内昭彦(2003)『大久保遺跡—B地点の調査—』児玉町遺跡調査会報告書第14集
- 坂本和俊他(1990)『秋山古墳群』児玉町史資料調査報告 古代第2集
- 櫻井和哉(2004)『児玉大久保遺跡—C地点の調査—』児玉町遺跡調査会報告書第17集
- 菅谷浩之他(1980)『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書第1集
- 鈴木徳雄(1987)「古代那珂郡における水利灌漑と在地信仰」『秋山東遺跡』児玉町遺跡調査会報告書第2集
- 鈴木徳雄(1996)「古代北武蔵の開発と集落」『月刊文化財』11月号 No.398
- 鈴木徳雄(1997)「古代北武蔵の土地利用と集落」『日本歴史』9月号第592号
- 鈴木徳雄他(2007)『秋山諏訪平遺跡—C地点の調査—』本市市遺跡調査会報告第17集
- 中村倉司他(1980)『廼麤神社前遺跡』埼玉県遺跡調査会報告第39集
- 永井智則他(2005)『脊戸谷遺跡—宮内古墳群の調査—』児玉町遺跡調査会報告書第19集
- 長滝歳康(1992)『後山王遺跡』美里町遺跡調査会
- 長滝歳康・中沢良一(2004)『広木大町古墳群第14号墳・川原遺跡』美里町遺跡調査会報告書第5集
- 長滝歳康・中沢良一(2005)『広木大町古墳群後山王地区後山王遺跡E地点』美里町遺跡調査会報告書第6集
- 長滝歳康・中沢良一(2010)『村後遺跡B地点・大仏廃寺跡・広木上宿遺跡II』美里町遺跡発掘調査報告書 第19集
- 松澤浩一(1998)「秋山諏訪平遺跡」『治水・利水遺跡を考える』第7回 東日本埋蔵文化財研究会
- 丸山陽一(1990)『国指定史跡水殿瓦窯跡試掘調査報告』美里町遺跡発掘調査報告書第6集
- 山本 靖(1996)『広木上宿遺跡—古代・中世編—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第170集
- 湯山 学(1985)「武蔵国那珂郡中沢郷と中沢氏」『武蔵野』63-1
- 埼玉県教育委員会(1983)『鎌倉街道上道』歴史の道調査報告書第1集

写 真 图 版



SI-01 出土遺物



SI-02 出土遺物



SI-03 出土遺物



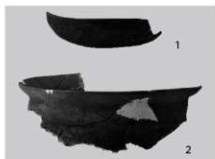
SI-04 出土遺物



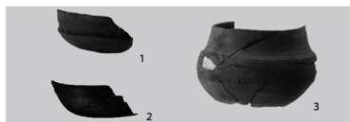
SI-06 出土遺物



SI-07 出土遺物



SI-09 出土遺物



SI-11 出土遺物



SI-10 出土遺物



SI-12 出土遺物



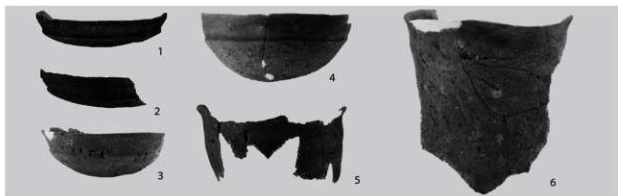
SI-13 出土遺物 (1)



SI-13 出土遺物 (2)



SI-14 出土遺物



SI-15 出土遺物



SI-16 出土遺物

SI-20 出土遺物



SI-22 出土遺物



SI-24 出土遺物



SI-25 出土遺物



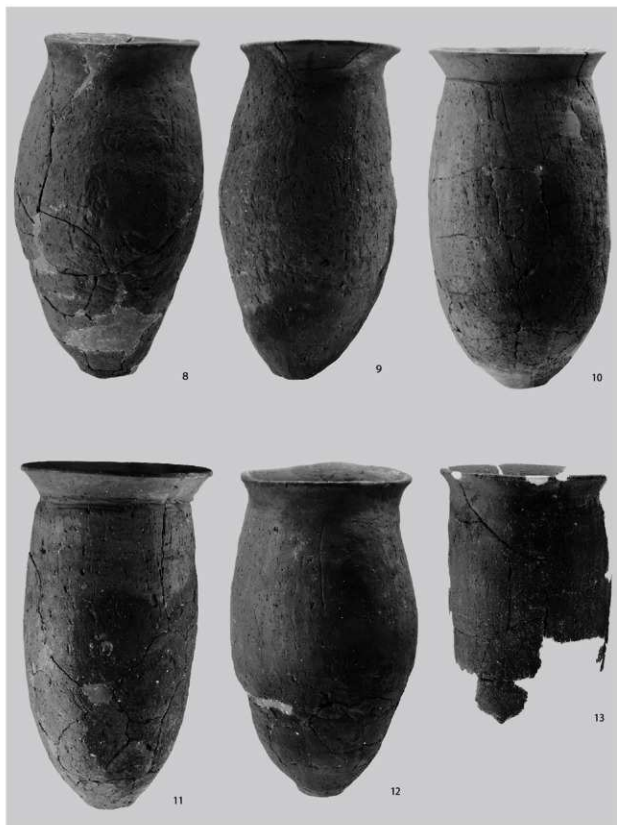
SI-26 出土遺物



SI-27 出土遺物



SI-28 出土遺物 (1)



SI-28 出土遺物 (2)



SI-28 出土遺物 (3)



SI-29 出土遺物



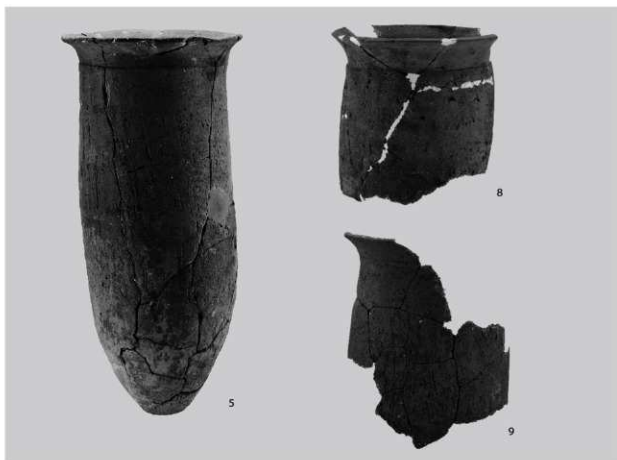
SI-30 出土遺物



SI-32 出土遺物



SI-33 出土遺物 (1)



SI-33 出土遺物 (2)



SI-34 出土遺物



SI-35 出土遺物



SI-36 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あきやますわだいらいせき2							
書名	秋山諏訪平遺跡Ⅱ							
副書名	B地点の調査							
巻次								
シリーズ名	本庄市遺跡調査会報告書							
シリーズ番号	第38集							
編著者名	石丸敦史							
編集機関	本庄市遺跡調査会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会内 In 0495-25-1185							
発行年月日	西暦2010(平成22)年10月28日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
秋山諏訪平遺跡 B地点	埼玉県本庄市 児玉町大字秋山	市町村	遺跡 番号	36° 10' 34"	139° 09' 13"	19910325 ～ 19910629	754 m ²	宅地造成に伴う 緊急発掘調査
		112119	54-044					
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
秋山諏訪平遺跡 B地点	集落跡	古墳時代 平安時代		住居跡 36棟 土坑		土師器・須恵器		古墳時代後期・ 平安時代の集落跡。

本庄市遺跡調査会報告 第38集

秋山 諏訪平遺跡Ⅱ

— B地点の調査 —

平成22年10月28日 印刷

平成22年10月28日 発行

発行／本庄市遺跡調査会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

本庄市教育委員会内

電話 0495-25-1185

印刷／朝日印刷工業株式会社